

中国地方中山間地の環境資産を活用した 持続可能な発展に関する研究

長谷川 弘・森嶋 彰・三浦 浩之

(受付 2007年10月11日)

はじめに

平地に比べ地形的にも経済的にも条件の厳しい中山間地は農林業を主幹産業とし、景観、歴史・文化、動植物、温泉等、豊かな自然環境や観光資源に恵まれた地域が多い。都会人の野外活動志向、環境を重視するライフスタイルの普及、そして水源地としての治山治水機能の重要性と相俟って、こうした自然・社会環境の価値が見直される一方、高齢・少子化や農産物自由化に伴い中山間地の経済は疲弊し活力を失ってしまった。加えて、高度経済成長期のリゾート開発や化学肥料・農薬を多投することによる農林業の工業化により、長い歴史の中で地域住民が保全してきた生活環境や里山的機能が損なわれてしまった。

このような背景の下、本調査研究では、広島県を中心とする中国地方の中山間地域（69市町村が中山間地として指定されている）の内から、特徴的な環境資産を有する3市町（旧安浦町・江府町・竹原市）を対象に、以下の3項目を中心に調査し、これらの現状把握と課題分析を行うことを目的とする。

- 1) 中山間地の経済活性化へ向け講じられてきた国や地方自治体の各種施策の導入と効果
- 2) 農地・景観保全、里山保護、有機農業、新エネルギー開発、廃棄物の再資源化等、環境配慮・環境資源活用への中山間地域の取り組み
- 3) 地域振興、環境保全、都市との交流等、地域活性化に対する中山間地域住民の意識や願望

従来の中山間地域を対象とする調査研究は、地域振興や村おこしを主眼とし経済面をクローズアップしたものが多く、環境保全や町村の重要な財産である自然資源について掘り起こした研究は数少ない。本調査研究は、「今後の中山間地発展においては、その地域が有する環境資産との関わりが最も重要」との観点から、環境資産を中心に地域の抱える課題と解決策を捉え直してみようとする試みである。

中山間地に多く見られる里山、棚田、溪流等は日本の原風景として重視されつつあり、周辺の山林野とともに、重要な環境的機能や恩恵を与えてくれる財産との国民的認識が広まり、それら農村環境や自然資源の保全を目的とした「中山間地等直接支払制度」や新エネルギー

開発のための補助金制度の導入が開始された。また、有機農業、景観作物等への取組み、地産地消、直産木材販売、アグロ・エコツーリズム等、かつての「一村一品」運動の行き詰まりを克服する動き、あるいは農業残渣再利用、市町村合併をにらんだ新しい環境配慮アプローチが検討されている。

本研究では、これらの新しい試みについて検証し、その実用性、可能性、将来展望を、中山間地での「持続的発展」、「循環型社会」というコンセプトに基づき分析しようとするものである。

なお、以下において、旧安浦町は長谷川、江府町は森嶋、竹原市は三浦がそれぞれ分担執筆した。

1. 旧安浦町野呂川周辺地域の環境資源利活用の現状と地域活性化対策

広島県旧安浦町の中でも、特に少子高齢化の傾向が強く中山間部に位置する野呂川周辺地域の活性化が急務となっている。野呂川流域には多くの自然資源や観光資源が存し、地域住民もそれらを高く評価し地域活性化を願っているにも関わらず、有効な資源活用ができていない現状が確認された。最大の原因は高齢化・過疎化による若き指導者の欠如、積極的に体を動かせる住民の不足である。

本研究では同地域の環境資源利活用や地域おこしの方策を提言するため、それら環境資源についての現地踏査、関連資料文献調査および住民意識アンケート調査を実施した。なお、旧安浦町は本研究調査期間中の2005年3月に、近隣市町との合併により呉市に編入されたが、本稿においては当時の行政区分のまま「安浦町」として記載するものとした。

(1) 野呂川周辺地域の地理と主要環境資源

1) 地 理

安浦町北西部に位置し、中畑地区は中畑川沿い、市原地区は野呂川沿いに立地している。標高は概ね 150～200 m の位置にあり、そのほとんどが山林または傾斜地である。

交通網については、県道矢野安浦線が中畑地区を南北に貫いており、安浦町中心部と黒瀬町を結ぶ交通軸に位置している。中畑地区から市原地区を經由し、野呂山に至る町道および林道が整備されており、野呂山に至る結節点に位置している。

2) 野呂山

野呂山は、昭和25年に瀬戸内海国立公園に指定され、1市2町（呉市、安浦町、黒瀬町）にまたがる山で、標高は 839 m（膳棚山）である。瀬戸内海に面している山々の中では、神戸の六甲山（939 m）に次いで第2番目の高さである。瀬戸内の温暖帯から山頂部の冷温帯に

わたる植生が連続しており、本来標高 700 m 以上のところではみられないヤブニッケイ、ネズミモチ、ヤブツバキ、ハイノキ、ムベ等、常緑広葉樹が数多く見られる他、冷温帯の植物であるミヤマシキミと暖温帯のキシミが一緒に見られる。

呉市二級峡～安浦町（20.4 km）にかけての中国自然歩道では、膳棚山・野呂山からの瀬戸内海の眺望、氷池周辺の植物、かぶと岩・大なめら岩等の奇岩、弘法寺のスギ・ヒノキ等見所がたくさん存在する。

安浦町は、広大な裾野をもった野呂山の東に位置しており、里山としての利用は盛んに行われていた。農村が都市化され農業が近代化される前、里山の雑木林は自然資源供給の場として重要な役割をなしていた。農作物栽培のための肥料や家畜の餌、農家のためのエネルギー・食料は雑木林から得られていた。自然資源を持続的に利用するために、里山管理は行われていた。現在はほとんどの資源を都市部から供給しており、里山の役割は無くなってしまった。最近になって、里山に住む生物の価値やリекреーションの場としての価値などが見直されつつある。しかし、農業離れや高齢化による後継者不足により、里山は手入れが行わ



図 1 安浦町野呂川周辺地域の環境資源マップ

れず荒廃してしまっている。人員不足を補うために、地元の里山所有者や森林インストラクターなどの指導の下に、里山管理や里山体験を行うプロジェクトが広まりつつある。そこでは、森林資源の利用のみならず、リクレーションや環境教育の面でも貢献できる。

3) 野呂川

野呂川は野呂山に源を發し、下流安浦町の中心部を貫流して瀬戸内海に注ぐ流域延長 10 km、流域面積 43.2 km² の河川である。安浦は急峻な地形に加えて雨水が浸透しにくい土壌のため、雨水が浸透する前に一気に流出してしまう。そのため、古くから幾度にわたって氾濫し、下流の内海地区に大きな被害を与えてきた。野呂川下流部は、昭和27～33年にかけて、河川改修がなされたが、その後も台風および集中豪雨時にはしばしば洪水による被害を受けている。特に昭和42年7月の集中豪雨による被害は著しく、公共施設、人家などの被害は甚大だった。

1969（昭和44）年に恒久処置として計画流量を改定し野呂川ダム建設工事が始まり1976年に完成した。本ダムにより下流域の水害を防除し灌漑用水の確保を図るとともに、周辺環境を良好に保つためダム周辺には「やすらぎ公園」、キャンプ場、運動広場等が整備され、現在も住民に水と緑の豊かな憩いの場を提供している。

一方、野呂川は農業を中心とした産業の重要な自然資源である。豊富な水源によって、昔から干ばつによる被害は少なかったといわれている。そして、野呂山の豊富な森林を保全していくことは、すなわち野呂川流域を保全することにつながる。なぜなら、森林は水源を浄化、涵養するとともに、国土保全や洪水調節などの自然のダム機能を発揮するからである。農村における循環型社会を実現するためには、流域の水源から下流域の環境まで、視野を広げていく必要がある。

4) 棚 田

安浦町は、気候的に温暖で明るい霧囲気の瀬戸内海に面している。また、すぐ背後には野呂山を従えており、非常に自然景観の多様な地域といえる。この野呂山の傾斜地を利用した棚田、野呂山の高台から眺める瀬戸内海は、他地域ではなかなか見ることができない景観を醸し出している。その中でも棚田は、日本を代表する風物詩であるが、景観のみならず、棚田の持つ治水機能（ダム機能）、生物の多様性、文化の多様性などの多面的な機能が見直されつつある。

(2) 野呂川周辺地域に対する安浦町民の将来イメージと課題

ここでは、「第2期安浦町長期総合計画（サンライズやすうら21プラン）」（平成10年3月）、「安浦町都市計画マスタープラン」（平成14年3月）および「安浦町緑の基本計画」（平成15年3月）を策定する際、安浦町が実施した住民アンケート調査の結果を分析し、町民全体が

描いている野呂川周辺地域の将来イメージと課題を整理した。

同地域に対して、町民は「生活環境が整った農村集落」、「澄んだ空気や水、緑に囲まれた田園地域」というイメージを持っている。そして、①豊かな自然環境の保全と活用（自然環境の保全と水源地としての山林資源の保全）および②豊かなふるさとと景観の保全・育成（生活者の利便性の向上と農村集落景観の保全・育成）を期待し、特に野呂山、野呂川等の緑地景観資源の有効利用を強く希望している。

同地域においては自然環境資源の活用を図るため、いくつかの取組みがなされてきたが、地域住民はこのようなイメージに基づいて自ら地域を活性化することには消極的であり、十分な成果が生まれていない。原因の一つは、中山間地が広範囲に点在し、かつ過疎化による人口減少や高齢化のため、活動の中心となる組織等の育成ができなかったことによる。以上の背景から、野呂川周辺地域の課題を次の2点に整理した。

- 地域の魅力を再発見し、豊富な自然資源を活用する地域振興策
- 自然環境と共生しながら住民自らが行動する活性化の仕組みづくり

(3) 野呂川周辺地域住民への意識アンケート調査結果

野呂川ダム上流域の野路山、中畑、市原の3地区および下流部の原畑地区の計4地区を対象に、住民意識アンケート調査を実施した。調査時期は2005年1～2月で、野呂川周辺地域の自然・観光資源、地域活動、まちづくり等に関する地域住民の意識や実際の活動について質問している。以下はその調査結果と分析内容である。

アンケート用紙は、各地区の自治会長を通じほとんど全ての構成世帯（計190世帯）に配布され、合計137世帯から回答があった。次表のように原畑地区では約80%、4地区全体でも72%という高い回収率を示している。

表1 地区別アンケート配布・回答世帯数

地区	中畑	市原	原畑	野路山	合計
配布世帯数	58	33	87	12	190
回答世帯数	45	17	69	6	137
回収率 (%)	77.6	51.5	79.3	50.0	72.1

ちなみに、回答記入は各世帯の代表者に依頼したが、4割近くが70歳以上で、性別では男性回答者が女性回答者を若干上回った。また、回答者の職業別では農林業従事者あるいは無職がそれぞれ全体の3割前後を占め、対象地域が高齢化傾向そして農村地帯にあることをうかがわせる。そして、3割以上の世帯が収入源を呉市、東広島市といった安浦町外に依存しており、同地域の経済活性化が遅れている状況を示している。

1) 自然資源・観光資源について

野呂川周辺で見うけられる代表的な自然・観光資源の中から、住民たちが自慢できるものを複数回答してもらった。次表のように、複数の資源に分散しているが、対象地域の中心に位置する野呂川ダム・キャンプ場とする回答が最も多かった。

これら以外に「その他」として、野呂川に生息するオオサンショウウオ、メダカ、ホタルといった生物資源、同地域に多い平家落武者子孫やイノシシ垣が歴史的資源として指摘された。特に、ホタルは自慢できる資源として多くの原畑地区住民が回答している。

表2 野呂川流域で自慢できる自然・観光資源（複数回答）

地区	秋祭り、 収穫祭	野呂山の 山並み	棚田の 風景	野呂川	野呂川ダム キャンプ場	野路山 弘法寺	トンド 焼き	その他
合計	27	46	27	40	53	48	25	14
中畑	4	16	15	10	17	19	13	3
市原	1	9	3	6	12	6	0	2
原畑	22	20	9	24	24	19	12	8
野路山	0	1	0	0	0	4	0	1

次いで、自然・観光資源の中でも重要な要素となる景観に着目し、野呂川流域周辺で住民たちが抱えている風景について質問した結果、表3のように「緑豊かな山並み」、「山間部にある比較的小規模の水田」の順に回答があり、「落ち着いたある民家のたたずまい」あるいは原畑地区住民を中心に「田園地帯を流れる川や沼などの水辺」を選んだ者も多かった。また「その他」として、秋季の紅葉を具体的風景として挙げた住民も目立った。

以上の結果より、アンケート対象地域住民の景観的イメージは、山々に囲まれた中山間部の田園地帯や自然豊かな農村であり、現在の野呂川流域周辺は里山とも言える日本の原風景を残している地域と考えられる。

表3 思い浮かべる野呂川流域の風景（複数回答）

代表的風景	中畑	市原	原畑	野路山	合計
平野に広がる、きれいに区画された水田	1	0	2	0	3
山間部にある比較的小規模の水田	24	8	24	1	57
平地や丘陵地に広がる果樹園や野菜畑	1	1	0	0	2
落ち着いたある民家のたたずまい	16	5	15	1	37
田園地帯を流れる川や沼などの水辺	3	3	25	0	31
きれいに整備された市街地	1	0	1	0	2
緑豊かな山並み	22	5	39	3	69
その他	1	2	6	0	9

表4 地域資源に対する住民評価

地区	大いに価値がある	価値がある	どちらかといえば価値がある	あまり価値がない	価値がない
合計(%)	29(22.5)	40(31.0)	28(21.7)	23(17.8)	9(7.0)
中畑	10	13	10	5	4
市原	2	7	3	4	1
原畑	16	20	13	13	3
野路山	1	0	2	1	1

これら同地域の自然・観光資源や景観に対する住民の意識や認識を踏まえ、実際にこれらの地域資源を住民自らはどのように価値評価しているかを尋ねたものが表4である。

回答者の2割程度しか高く評価していないものの、「どちらかといえば価値がある」といった中程度の評価までも含むと、75%以上の住民が地域の資源に何らかの価値を見出していると推察できる。

さらに、住民の価値観とは別に、現存するこれらの地域資源をどのようにすべきかについて、保護型(A)、利用型(B)および開発型(C)の三つの将来パターンを以下のように設定し選択してもらった。

- A. 生物・文化の多様性などの潜在的な価値があるので、自然・文化遺産として保護すべきである(保護型)
- B. 遊歩道整備、資料館設置などのレクリエーション的な付加価値を付けて有効利用を促すべきである(利用型)
- C. 利用価値はないので、道路整備、福祉施設整備、企業誘致などの開発を優先して欲しい(開発型)

全体の回答結果からは、地域資源を保護すべきとする意見が最も多かった反面、有効利用、さらには開発を望む声も少なくない。表4において高い評価を与えた原畑地区住民ほど保護指向であり、同地区に比べ他地区において道路等の社会資本整備が遅れている現状を反映したものと考えられる。その他(D)の意見としては、荒廃水田の改善、河川の保全、ホテル

表5 住民が望む地域資源の利活用方法

地区	A(保護型)	B(利用型)	C(開発型)	D(その他)
合計(%)	41(37.3)	33(30.0)	30(27.3)	6(5.4)
中畑	12	16	12	1
市原	6	2	7	1
原畑	22	13	10	3
野路山	1	2	1	1

観賞用遊歩道の設置、展望台・観光用駐車場の整備など、地域資源の有効利用に向けた具体的提案が寄せられた。

地域資源の利活用においては、特に観光資源を中心に同地域への外来者が想定されなければならぬが、外来者に対する住民の意向としては、アンケート回答者全体の5割弱が現在よりも多くの観光客が訪れることを強く望み、3割が現状維持、残りの2割強の住民が受け入れに消極的という結果となった。4地区の中でも、幹線道路である県道矢野安浦線沿いに位置する中畑地区や野呂山に近接する野路山地区の住民が外来者の受け入れに積極的である一方、野呂川ダム直上流部の市原地区や市街地中心部に近い原畑地区の住民には外来者の増加に慎重な意見も多かった。これら地区間の相違は、表5に示された資源利活用への意向とも合致していると考えられる。積極的な観光客受け入れに難色を示す理由として、従来から問題となっている外来者によるバットの放置やダム湖乗入れ車輛による交通混雑が挙げられた。

2) 地域活動について

過疎化や高齢化に瀕する野呂川周辺地域の活性化を図る1つの重要な要素は、外部や都市住民との地域交流と考えられる。次表はこのような地域交流に対する住民の回答結果である。明確に「反対」を唱える住民はごく少数であり、前向きに考えている地域住民がほとんどである。地域交流の内容としては、祭・催し物や農業体験ツアーとする回答が多く、旧道ルート野呂山レクリエーション登山、ホテル見学会、自然保護ボランティア活動といった具体的な企画も提案された。

表6 住民の地域交流への意向

地区	賛成	反対	わからない
合計(%)	75(61.0)	6(4.9)	42(34.1)
中畑	30	0	12
市原	5	2	8
原畑	37	3	21
野路山	3	1	1

上記の「農業体験ツアー」は、調査対象地域のような農村の地域交流や経済活性化を考える上では大切な手法である。「緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」あるいは「農山漁村に住む人々が都市に住む人々とふれあうこと」といった定義で、通常「グリーンツーリズム」や「アグロ（アグリ）ツーリズム」と呼ばれエコツーリズムの一形態であろう。表7はこのグリーンツーリズムに対する住民の関心度を整理したものである。

表7 グリーンツーリズム活動に対する関心度

地 区	大変関心がある	関心がある	関心がない	受け入れ側として参加	参加者側として参加
合 計	8	50	55	3	3
中 畑	3	21	16	0	0
市 原	1	9	4	0	2
原 畑	4	18	34	3	1
野路山	0	2	1	0	0

地域住民の過半数が何らかの関心を持っており、実際に体験した者がいることも判明した。体験者からは、都市住民との交流は意義がある、主催者や参加者は非常に熱心という感想の他に、長続きしないとといった面も指摘された。

1996年に「ケナフの会」が広島に発足し、ケナフという未知の植物の魅力と可能性を地域活性化、環境教育、創作活動、商品開発など様々な切り口で活動を展開しており、多くの安浦町民も参加している。地域交流の一例としてこの活動を取り上げ、野呂川地域住民の関心度や参加状況を表8にまとめた。実際に参加した住民もいるが、全体では積極的な参加意志は低いという印象である。アンケート回答からは、地域活性化におけるケナフの利用価値が不明確であったり、栽培活動のアフターケアが不足していたりといった不満点が寄せられた。

表8 「ケナフの会」活動への関心度

地 区	大変関心がある	関心がある	関心がない	実際に参加
合 計	3	39	71	6
中 畑	2	12	24	2
市 原	0	5	9	0
原 畑	1	20	37	4
野路山	0	2	1	0

ここでアンケート質問事項とした「グリーンツーリズム」と「ケナフの会」は、それぞれの活動内容や住民の理解度も異なり、住民たちの地域交流活動への行動力を一概に推測することは困難であろうが、今後同地域でこのような活動を企画・推進していくためには、活動が地域おこしにどう結びつくかが明確であること、そして持続的な活動維持が担保できることが重要と思われる。

アンケートでは、さらに地域資源の活用企画やそれへの参加意向について、より具体的に住民に問うている。最大公約数的な住民意志の主な特徴は以下のとおりであった。

- ・ 地域資源の利活用の最大の目的は地域の活性化であり、同時に自然環境や文化資源の保

全、地域の PR、そして将来世代の生活の場の構築を期待する。

- ・資源利活用のアイデアとしては、秋祭りや農業収穫祭、ハイキングに加え、農業体験、休耕田利用、観光農園等が適当と考える。
- ・そのための企画、運営、手伝い等には都合の許す限り参加・協力したいが、実施に当たって指導者が少ないことや高齢者が多いことが不安である。
- ・これらの活動においては環境の悪化が懸念され、自然破壊、廃棄物や交通渋滞・騒音被害の防止には十分留意すべきである。

3) まちづくりについて

アンケートによると、野呂川周辺地域住民の半数以上が現在の居住環境に何らかの不満を抱いていることが分かった。その原因は、下表のように交通、上下水道、教育文化施設、福祉医療等のインフラや公共サービスの不備にあると思われる。

また、野呂川ダム上流に位置する市原地区住民からは住居後背面からの土石流への不安、下流域の原畑地区住民からは上流部での下水道整備強化といった上下流間での異なる居住位置に基づく意見も散見された。

表9 居住環境への不満点（複数回答）

地 区	交通手段	上下水道、 道路、ゴミ など	仕事環境	教育文 化施設	少ない 観光客	福祉、 医療	他地域 交流	通信手段	その他
合 計	43	33	10	18	3	22	8	5	4
中 畑	15	5	5	10	2	5	6	0	1
市 原	7	5	1	1	1	3	0	1	2
原 畑	20	20	4	7	0	13	2	3	1
野路山	1	3	0	0	0	1	0	1	0

同地域の過疎化傾向については、アンケート回答者の7割以上が実感として抱いており、以下のような現象から強く感じるとするすべての地区の住民の共通意識が存在する。そして、これらの現象の中でも過疎化や高齢化を食い止めるためには、若者を引きつける雇用機会や職場環境の創出が最も重要とする意見が多かった。

- ・独り暮らしや廃屋が増え、農業後継者不足で棚田がどんどん荒廃していく。
- ・若者や子供が少なく、会合参加者は老人ばかりが目につく。
- ・不便な交通機関、小学校が廃校になるなど少ない教育・文化施設や職場。
- ・新しい地域活動や催し物が少ない。

今後、同地域を都市化する方向性については、反対よりも賛成する住民がやや上回っていた。生活の利便性、人口増加、雇用機会確保等、地域の活性化を期待しての賛成理由が多い

反面、反対者は同地域の自然や農村風景の破壊、ゴミや犯罪の増加、都市公害等、環境面への悪影響を懸念している。

表10は住民が望んでいる同地域の将来イメージについてのアンケート結果である。

表10 住民が望んでいる将来イメージ（複数回答）

地 区	観光客があふれ活気あり	農村伝統文化が守られる	高齢者が住みやすい	若者が集まりにぎやか	農林業が中心	都市化工業化	景観や自然環境が守られる	現状のまま	その他
合 計	12	32	76	21	14	11	59	16	4
中 畑	6	14	25	8	3	3	18	3	1
市 原	3	5	12	2	6	1	10	1	0
原 畑	3	13	37	11	5	7	30	11	2
野路山	0	0	2	0	0	0	1	1	1

必ずしも大規模な観光化、都市化、工業化あるいは農業振興を望んでいないものの、現状の自然環境や地域文化が十分保全された高齢者にとって住みやすい地域を期待していると総合的に判断できよう。そして、一部の回答者が「その他」として都市住民との交流が大切との意見を述べていることも重要である。

(4) 環境資源を活用した地域活性化対策案

上記の環境資源の現状や住民意識アンケート調査結果を踏まえ、地域交流、グリーンツーリズムあるいは野呂山観光との連携から、いくつかの地元資源を活用した活性化対策案を提言する。

1) 野呂山（表11）

雑木林の荒廃は、二次的な自然生態系の崩壊だけでなく、害獣の増加や廃棄物の不法投棄の要因となっている。適度に人の手が加わることにより、里山の機能を維持することができる。しかし、里山の燃料、肥料としての利用価値が下がっているため、新たな利用方法を検討する必要がある。

里山の森林は、小規模かつ地理的条件が厳しいので、コスト面を考えると全国に流通するパルプや木材加工品に使用するのではなく、地元あるいは観光事業用に木材工芸や炭・薪に使用するのが現実的であると考え。また、手入れの行き届いた雑木林では、ゼンマイ・ワラビなどの山菜、松茸、椎茸などのキノコが取れ、産直市で販売すれば、地元産物としての幅が広がるものと思われる。

里山の利用を促すことにより、中山間地域特有の循環型社会を構築でき、また、社会経済的にも環境的にも持続的な効果をもたらされると考えられる。

表11 野呂山の活用方法

分類	活用内容	効果
生物多様性 伝統文化継承 害獣防除	野呂山周辺の雑木林の下刈り、間伐などの野呂山の森林保全ボランティアを募集する。	野呂山の荒廃を防ぎ、野呂山に生息する生物の多様性を維持することができる。また、保全活動を通じて里山文化の意義を認識することができる。里山と里地に緩衝帯を設けることにより、イノシシなどの害獣を防除することができる。
バイオマス リクリエーション 伝統文化継承	間伐材を利用した薪・炭、木工品の販売を行う。 間伐材を再生可能エネルギー源として利用する。 腐葉土を農業や家庭菜園の肥料として利用する。	観光目的に炭や木工品の販売を行い、野呂山の里山としてのブランドを確立する。 炭焼きや木工品の加工技術を学ぶことにより、伝統文化の継承を行うことができる。 自然資源の調達から再利用まで循環型の社会を築くことができる。
食料の生産 リクリエーション	周辺市町村住民を対象にした山菜・キノコ狩り、また、その直販を行う。	地元農産物としての幅が広がり、増加傾向にある輸入品から地産地消への移行に貢献することができる。
生物多様性 環境教育 エコツアー	野呂山に生息する動植物の観察ツアー・イベントを実施する。 2004年に結成された「野呂山感動クラブ」を主体として自然観察、勉強会を開催する。 野呂西小学校跡地を拠点とした、野呂山、野呂川の自然資源活用の情報発信基地とする。	生物多様性の保護、環境教育の生きたフィールドとして野呂山を活用することができる。 広島-矢野-黒瀬-安浦、東広島-黒瀬-安浦など都市圏からの訪問者増加を図ることができる。
リクリエーション 自然景観	野呂山にはいくつかのハイキングコースが存在する。その既存ハイキングコースの整備ボランティアを募集する。 登山道、標識の整備、休憩所の整備を行い、ガイドマップの作成を行う。野呂山に生息する野生動植物の紹介や瀬戸内の景観を紹介する。	登山ブームにあやかり、ハイキング目的のリピーター増加が期待できる。 コース整備に間伐材の利用を促すことにより林業の活性化を図ることができる。 野呂山ハイキング前後の休養を目的として、旧グリーンピア安浦の利用を促進することができる。

2) 野呂川 (表12)

野呂川水系の地下水は、豊富なミネラル分を含んだおいしい軟水である。野呂川は農業用水としてだけでなく、農産物の加工品である酒、醤油を作り出してきた。また、三津口湾のカキ養殖に好条件な水環境を作り出していた。この他、安浦町の特産品としては、竹炭、ハーブ、しいたけ漬物、饅頭せとの花、山椒やいかなごの佃煮、いちじくジャム等がある。

伝統的な食文化を見直すとともに、それを継承するために野呂川流域の保全を行っていく。野呂川から受ける自然の恵みへの認識を深めることによって、環境や地域作りに対する意識を高めることがねらいである。例えば、蛍の棲む川を地域外にアピールすることによって、地域資源を活用した都市との交流を図ることができる。また、実際に流域の清掃や草刈りを体験してもらうことによって、流域保全の意義を自ら考えてもらうきっかけを作ることができる。

表12 野呂川の活用方法

分類	活用内容	効果
水質浄化	森林ボランティアを通じて、野呂山の森林保全を行う。 流域の草刈り、ゴミ拾いを行い水質の浄化を図る。	水源を涵養している野呂山の森林を保全することによって、水質の浄化を図ることができる。安浦における水資源の自立化を図る。 実際に流域保全に関わることにより、安浦住民の環境に対する意識を変化させることができる。 ミネラル豊富な水によってカキ養殖を活性化することができる。
生物多様性 環境教育	「螢を見る」イベントを通して、伝統文化と生物多様性保護の融合を図る。	生物多様性の保護、環境教育の生きたフィールドとしての活用が期待できる。
伝統文化継承 経済効果	野呂川の天然水を利用した食品加工を見直すことによって安浦の産業を活性化させる。	酒、醤油、うどん、伝統的な食品加工産業を継承することができる。 さらに、米、麦、大豆など地元食材を利用することによって、農業の活性化を図ることができる。
リクレーション 景観	野呂川ダムを親水公園として整備する。景観を保全するために、住民を交えた清掃、整備を行う。 四季折々の風景（桜、紅葉など）を分析し、景観マップを作成する。	安浦の住民や都市から訪れる人々にとっての憩いの場となる。 野呂川、野呂山を結ぶ自然環境の中継点としての役割を深めることができる。
エコツアー 経済効果	地元自然保護団体、旅行会社を主体として野呂川流域の野鳥観察を実施する。	地元観光産業の活性化とともに、野呂川流域の生物多様性の保護を図ることができる。

野呂川ダムには絶好の憩いの場である公園施設が備わっている。親水公園としての役割を増すために、住民が主体となって活用方法の検討を行う。

3) 棚田（表13）

安浦町の持つ自然景観を次世代に残していくために、棚田を中心とした地域活性化事業を

表13 棚田の活用方法

分類	活用内容	効果
生物多様性 自然景観	棚田のオーナーを募集して棚田の維持管理を行う	棚田の後継者不足を補い、棚田が持つ生物多様性と農村景観を維持する。
環境教育	地元あるいは周辺市町村の小学生対象に、田植え、稲刈りなどの実地体験を行う 休耕地を利用してビオトープを作る。	普段自分たちが食している食べ物のできる過程を学ぶことにより、農業の仕組みや食べ物の尊さを学ぶことができる。 水田に生息する動植物を観察することにより、水田のもつ生物多様性を認識することができる。
国土保全	水田の特性を利用した蓮レンコンの栽培を行う。	水田のダム機能を維持することができる。休耕地の荒廃を防ぎ、再び水田として利用できる状態を維持することができる。
リクレーション	休耕地にひまわり、コスモスを栽培する。	観賞用の植物によって、棚田を観光としての利用が期待できる。
エコツアー	水田に生息する生物の観察会を開く。	生物多様性の保護、環境教育の生きたフィールドとしての活用が期待できる。

提案する。棚田の多面的な利用を促すことによって、棚田の持つ環境的な機能を再認識することが目的である。

(5) おわりに

従来の地域活性化事業では、地域の景観に調和しない近代的建築物の建設や集客・イベント色の強すぎる地域活性化事業が多く見られた。特に、行政中心の計画性のない補助事業などでは地域の魅力を十分に伝えることができないため、町外から訪れるリピーターは一向に増加しないと考えられる。公益的な効果をもたらす地域活性化事業というのは、聞こえはよいが非常に扱いが難しいプロジェクトと言える。施工よりむしろ計画の重要性を考えると、公益的な仕事は行政や公的機関のみではなく、各分野の専門家、NPO、地域の歴史に詳しい住民などを交えた議論が重要である。

また、旧安浦町は市町村合併により呉市に編入された経緯から、より広域的な視点から本調査対象地域の位置付けや活性化戦略を模索すべき局面に至っている。

<主な参考文献・資料>

- わがマチわがムラー市町村の姿 <http://www.toukei.maff.go.jp/shityoson/index.html>
- 農林水産省「2000年世界農林業センサス（農業編）」、「平成14年（産）作物統計調査」, 「平成14年工芸農作物調査」, 「平成14年生産農業所得統計」, 「平成14年産野菜生産出荷統計」, 「平成14年産果樹生産出荷統計」
- 安浦町公式ホームページ <http://www.town.yasuura.hiroshima.jp/>
- 「安浦町緑の基本計画」平成15年3月, 安浦町
- 「安浦町都市計画マスタープラン」平成14年3月, 安浦町
- 「安浦地域産業振興とコミュニティ再生強化をはかるための調査研究」平成14年3月, 広島大学

2. 鳥取県江府町の地域づくりの意識調査および検討

本研究は2004年度・2005年度の2カ年にわたって鳥取県江府町の協力を得ながら実施した。主な研究課題は、①地球温暖化対策を目指した小規模分散型エネルギー推進による自立可能で活力あるまちづくりに対する住民意識調査、②過疎化が進み衰退が続く「江尾駅周辺商店街」が活力を持ち、魅力的な街になるための住民意識調査と素材探しをすることを目的としている。

(1) 鳥取県江府町の概要

江府町は、鳥取県西部にそびえる大山南壁の麓に位置し、四季折々の美しい風景をつくりだす自然に恵まれている。米子市へ25 kmで町の中心部に国道181号線、JR 伯備線、およ

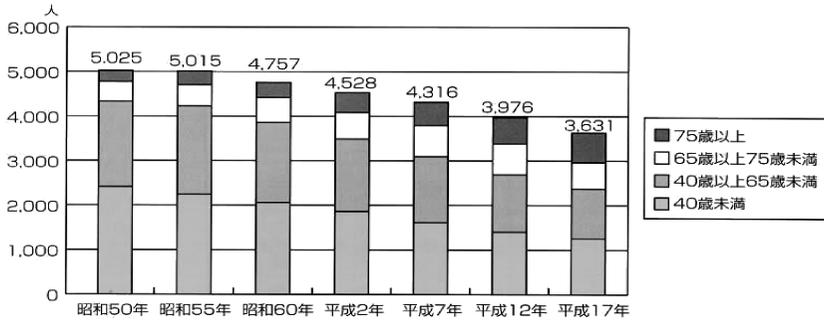


図2 人口構成の推移

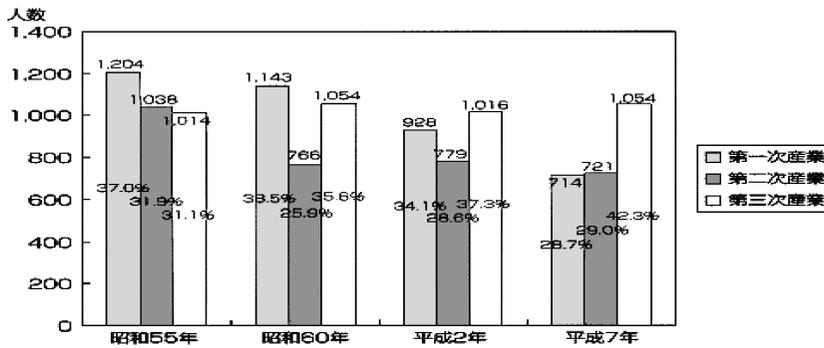


図3 産業別就業人口

(2) 地域づくりの現状と素材

1) 豊かな水

奥大山の源流水から醸造される地ビールや地酒、そばなど、素晴らしい自然環境につつまれた江府町ならではの特産品も多数ある。また、大山の万年雪が永い年月をかけてろ過され、標高1,200メートルの西日本最大規模のブナ林から湧き出るミネラルウォーターの販売事業をサントリー（株）が2008年春から開始する。



豊かな水



サントリー工場予定地

2) 豊かな自然

豊かな自然環境は、都市に暮らす住民やそこへ訪れる多くの人びとに、憩いと安らぎのひとときをもたらしてくれる。また、人びとを成長させてくれる「自然教室」でもあり、ここでは子どもから大人まで、一人ひとりが自然の中で学び、遊び、生きる。その実体験の場として設置されている市民農園『カサラファーム』には、500 m² (約150坪) の農園が21区画、250 m² (約75坪) が21区画の計42区画の広大な敷地があり、雄大な自然環境の中で、土と緑に親しみながら農業を体験することができる。



カサラファーム入口



宿泊棟



農園

3) 伝統芸能 (江尾十七夜)

文明年間、4代にわたって江美城の城主は、盆の十七日の夜に城内を開放し、城下の町人を集め、踊りと相撲を好んで催し、武士も町人もこの行事を年中の楽しみとしていた。しかし4代目の代に毛利氏によって一族は滅ぼされ、残された町人たちは、悲しい運命に果てた城主を慕い、来る年も来る年も盆の十七日の夜に供養の思いをこめて踊りあかした。これが500年にわたる伝統行事の「こだいぢ踊り」で毎年1万人を超える人出でにぎわっている。

(3) 住民の意識調査

地域づくりには、住民の意識を知り、ニーズを把握するとともに地域づくりに関する情報を的確に得ることが重要である。今回は、住民がどのような意識を持っているのかを知るために2つのテーマでアンケート調査をした。

4-1：テーマ1：江尾商店街が活力を持ち魅力的な街になるための素材探しと基本構想検討のためのアンケート調査（発送部数：100，有効回答数：48）

1) 現状認識

表1 江尾商店街に対する商店街住民の意識

	住民から寄せられた意見
江尾商店街に活力を感じない理由	<p>(1) 社会的現象によるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人口の減少・高齢化・後継者不足・通販の普及などによる。 ・車社会になり米子・隣町の溝口・根雨に出向き買い物をする。車の運転が出来ない者・老人のみが散歩がてらに買い物をしているのが現状である。 <p>(2) 商店街の構造によるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道路が狭く駐車場もなく利便性がない。(7～8割の人が指摘) ・大手のスーパーなどの大型店舗がない。 <p>(3) 商店街の取り組みに起因するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町や商工会そのものに活気がないし指導が不足している。 ・商店街の人は「人が来ないから売れない」と思っており、商店街の努力、連携、経営改善意識が低い。商店街の人に問題がある。 ・町村合併問題を契機に対岸の火事と思っていたことが眠っていた心を動かした。単独を選び町長も交替したことで明るい明日を期待している。保守的で殿様商売から脱皮することが大切である。 ・イメージが古く新商品の取り扱いが少ないなど時代に取り残されている。 ・情報が不足しており今何を売っているか判らないし、土日・祝日に店が開いていない。
江尾商店街の課題	<p>(1) 商店街の構造上の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住民のニーズに応えられるか・駐車場が出来るか・高齢者に適した商店街に出来るかがポイント ・国道181号線からアクセスが悪い。 ・道路の改良（安心して歩けない。歩道の整備が必要である。） ・商店が点在している。商店街の核づくりが必要。 <p>(2) 商店街の意識と人材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・核になるリーダーがいない。 ・新しさ、新鮮さ、明るさを、個性化、未来性などが不足していることを知る。 ・店じまいが早く夕方の仕事帰りに買い物が出来ない。遅くまで営業するなど他者に勝とうとする気持ちが不足している。 ・活性化しようとする気持ちを持つ。 <p>(3) 活性化に向けての取り組み力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時代のニーズにあったアイデア・イベント・各店舗のつながり・商店街としての客の動線を作ること。要するにやる気と企画力。 ・商店街自らが組織強化・集約化（協同店舗化活性化計画を早急に策定すべきである。） ・地産地消への取り組みが弱い。
	<p>(1) 商店街の構造上の提言</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者や車で行けない人が行き易い道路構造に改良する。 ・駐車場の整備が不可欠である。(7・8割の人が指摘している) ・似たような状況の商店街でも賑わっているところもある。これらの商店街から学ぶべき。 ・人を集める環境整備（施策）がない。 ・人が集まれる喫茶店や食堂はぜひ必要である。

活気を取り戻すためには何が必要か	<ul style="list-style-type: none"> 一度に用事が済ませられる構造に。例えば理容・美容も可能ならスーパーなどをまとめる。 商売をしたい人はいるので米子に見られるように期間限定で試験的に出店してみる仕組みを作ることで商店を増やす努力をする。 <p>(2) 商店街の努力</p> <ul style="list-style-type: none"> 消費者のニーズ調査から始めるべき。買いたくなる商品が少ない。 自らで企画した短期的にはイベント（上からのお仕着せでなく、仕掛け人が必要である） 江尾ならではの工夫。例えば顧客一人一人の注文に合わせて仕入れをして配達する仕組みを取り入れる。特に地場の新鮮野菜などだ。 強力なリーダーを育てる。 <p>(3) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政の支援が必要である。 役場の立替などの機会に駅周辺に移動させ、商店街に人が集まる工夫をする。
住民からの具体の提案	<p>(1) 商店街の構造に関すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> 町商工会が中心となり組織を作り、先進地（例えば日野町商工会など）の意見を参考にして活性化に取り組むべき。 駐車場・子供が遊べる施設・町民がだれでも触れ合える空間や老人が憩える場の設置を 空き家を集約化して商店街共同の駐車場と協同店舗の設置を 図書館・無料で利用出来る施設・コンビニがほしい。 空き家を公費で整備して賃貸する。 空き家を地元の奥地から米子に通う若い人の住宅として貸し出す。 空き家を活用してバンド練習ができるスタジオなどの若者が集まる場に。 空き家を若い子育て中のお母さんが集まれる場所、老人が囲碁・将棋が出来る場に。 <p>(2) イベントなど</p> <ul style="list-style-type: none"> 新鮮野菜の朝市や日曜市の開催などの商店街共同のイベントを開催する。 外部からの力に期待しているようでは活性化は困難。自発的に取り組むべき。 商店街に人を集める努力が足りない。パチンコ・飲み屋など何でも良いから人が集まりやすい環境の整備である。 商店街の人が評判の悪さに気づき、客商売をしているという意識を持つこと。 手をこまねいても悪くなるばかり。どんなことでも試してみることが良い。例えば減反田で「江尾そば」を作りそば関連商品を売り物にする。 行政・イベント・補助金などに頼る気持ちを捨て、保守的な発想を捨て、外部からの意見を積極的に受け入れる気持ちが必要だ。 空き家の所有者の協力関係を考えること。

2) 参加意欲

① 課題を解決するための取組みに参加するお気持ちがあるか。(有効回答数：41)

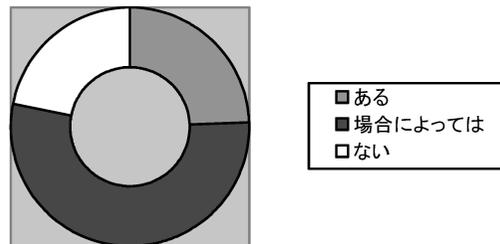


図4 参加の意欲

② 「場合によっては参加する」に回答された方は、どのような場合かお書きください。

- 町や商工会がやる気にならないとまわりがいくら一生懸命になってもだめ。
- 宅地の売却で協力したい。

- ・期待できる計画と住民のやる気が必要
- ・きっかけがあれば参加したい。
- ・自分たちで何とかしようという意識がみえれば参加したい。

③ 取り組みはどのような組織が望ましいか。

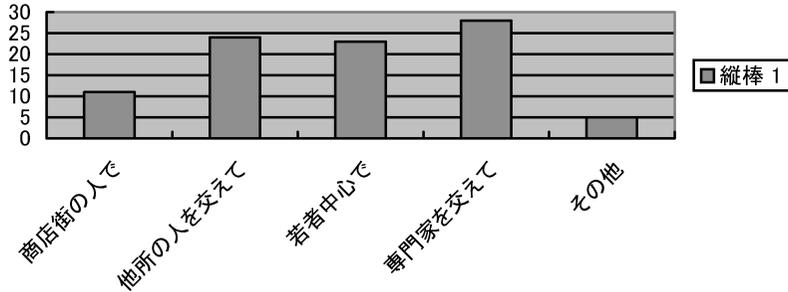


図5 取り組み体制

4-2：テーマ2：地球温暖化対策を目指し、江府町で利用可能なエネルギーを活用した活力ある町づくりのためのアンケート調査（発想部数：50，有効回答数：21）

1) 江府町のエネルギー消費状況

江府町では、電気、LPG、灯油、重油、ガソリン、軽油がエネルギーとして供給されている。全町的なデータが継続して記録されている電気では、平成13年度に町に供給された電力は、家庭が主体の「従量電灯 A」が約半分を占める。次いで、24%の業務用（事務所や公共施設）で使用される電力の比率が高い。

また、平成11年から平成13年度にかけて、電力の販売量は町全体で105%増加している。このうち、増加率が高いのは「業務用電力」「低圧電力」（ともに事業所や公共施設の利用）で1.1～1.3倍に増え、家庭が主体の「従量電灯 A」では103%増加している。これは人口世帯数が105%増（平成11年から平成13年にかけて）の結果と推測される。

平成13年

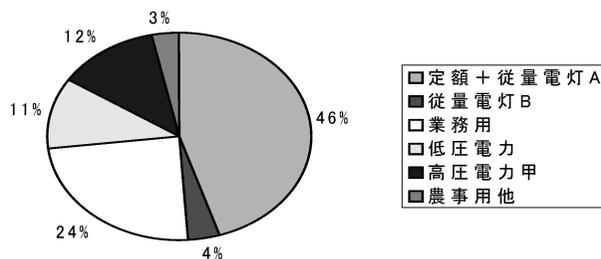


図6 江府町の電力の使用状況

表2 江府町の電力使用の変化

	平成11年	平成12年	平成13年	H13/H11
定額+従量電灯 A	7,923	8,143	8,147	103%
従量電灯 B	837	744	724	86%
業務用	3,844	4,335	4,369	114%
低圧電力	1,564	1,784	2,016	129%
高圧電力甲	2,381	2,232	2,228	94%
農事用地	663	893	625	94%
総合計	17,212	18,131	18,108	105%

(単位：MWh)

2) 化石燃料（ガソリン、LPG、灯油）の使用量について

平成11年度から平成13年度にかけての化石燃料の消費動向は、下図のとおりである。

化石燃料熱量構成比(平成13年;Kcal)

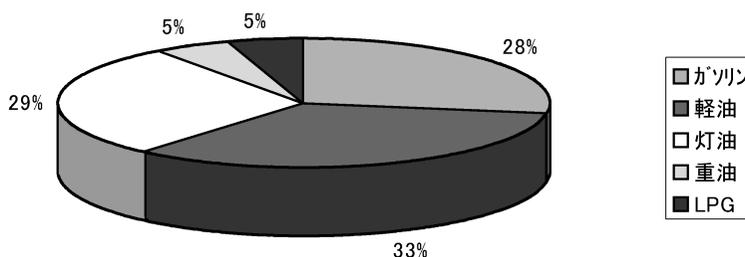


図7 江府町の化石燃料の使用状況

表3 化石燃料の使用量推移

	平成11年	平成12年	平成13年	H13/H11
ガソリン KI	1,311	1,488	1,527	116%
灯油 KI	1,464	1,381	1,522	104%
軽油 KI	1,629	1,681	1,644	101%
重油 KI	221	193	200	90%
LPG t	185	162	180	97%

3) 地球温暖化対策への取り組みの課題

役場、産業、住民が一体となって豊かな地域の自然エネルギーの普及啓発活動やバイオマスの循環利用（木質、畜産、生ゴミ）を促進などの取り組みによって、地域の循環型地域社会の構築をすることが必要と思われる。

4) 地球温暖化問題に対する意識調査結果

表4 地球温暖化問題に対する町民の意識

	あるまたは知っている	ないまたは知らない
地球の温暖化問題に関心はありますか	19	0
地球温暖化に関する世界的な条約が2月16日に発効し、日本はCO ₂ （炭酸ガス）の発生量を、2012年には1990年当時より6%削減する義務を守らなければならない、ということを知っていますか。	11	8
CO ₂ （炭酸ガス）は、石油やガソリンの使用、電気の使用、ゴミの焼却などの生活を支えるあらゆるところから発生し、②の約束を守るためには石油やガソリンの消費や生活スタイルの見直しが必要である、ということを知っていますか。	20	0
石油やガソリンに代わるエネルギーとして、風力・太陽光・水力・有機資源（木材や家畜糞尿など）の新エネルギーがある、ということを知っていますか。	19	1
最近日本の各地で、新エネルギーの使った町づくりが試みられていますか。江府町でも取組んだほうが良いと思いますか。	14	5

表5 まちづくりに対する町民の意識

	寄せられた意見
江府町にはまだ活力(元気)があるか。	<ul style="list-style-type: none"> •まだ活力がある：2 •活力がなくなりつつある：11 •もう活力がない：7
なぜ活力がなくなったと思うか。	<ul style="list-style-type: none"> •若者が少なくなったから。12 •自主的に町づくりをする町民の意識が薄れたから。8 •自分達で町を作ろうという気持ちはあるがその機会がない。4
活力を取り戻すにはどうすれば良いと思うか。	<ul style="list-style-type: none"> •空き家を利用して都市部からの転入の受け入れをし、若者が住みやすく働く場所をつくる。 •行政は国や県の下請けで終わらず、企画力を付けること。 •町の会議がまだ当職の委員で構成されている。実践的な人を活用すべきで町民に無記名推薦してもらってはどうか。 •30代～50代までの現役世代の知恵を登用すること。本当にこの世代の意見を聞こうと思えば日中に会議をすることにこだわってはいはだめ。 •町長を中心にして議員・役場が住民の意識を変えることが大切。 •農業と観光を結びつけることが最も重要。 •発想の転換を促し、出来ることからやれば出来ると思う。 •連帯意識が薄れてきているような不安がある。意識改革が必要と思う。 •今やっている行事などを必要なものに整理し、新たに取組むべきものを考える。
町に住む人々が地域社会の問題を自分自身の問題として考え自主的に自立可能な町づくりをすることは可能か。	<ul style="list-style-type: none"> •回答：思う：12 思わない：5 •国や県の意見の受身できた江府町が、今回独自に判断して再出発を選んだわけで地域の人たちがそれぞれの意見を出す良い機会だと思う。 •単独で生きることを選択した以上は現在の資源を生かして町づくりをするしかない。 •この機会にコミュニティーを生かした人的環境づくりが必要。 •予算配分を受益者の開発ニーズの強さを加味して行う。どのような展望と方法を持って活動しようとするのかを聞き、その実績を考慮して配分する。 •単独町を選んだ今時期には良い機会だと思う。住民の潜在的な能力はあるので意識改革をすれば活性化は可能と思う。 •農家の人が寄り道をしたりインターネットに「ママネット」のホームページを立ち上げるなどを通じて地域社会を考える取組みが少しずつ進んでいる。 •新しい考え方を排除する町の体質が問題

<p>役場の人・商工会の人・農協の人・女性会の人・青年会の人・一般の町民がお互いの立場を超えて地域づくりに取組むことは可能か。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 回答：思う：12 思わない：2 わからない：0 • 江府町に住む人たちはお互いに親近感が強く、お互い信頼できるので意見を出し合って地域づくりに取組んではどうか。 • 個々別々に考えても発展的なアイデアは出ない。各層の人々（代表ではなく中堅の実務者）が集まって意見交換し、問題意識を共有し、各々の場に持ち帰って実践し、そこで発生した課題を持ち寄って議論すること。 • 他人事だと思わないで取組まなければならない。横のつながりが大切。 • それぞれの立場で地域づくりに何らかの形で取組んでいると思う。 • 行政に頼らないで住民が自ら知恵を出すこと。自分の立場を守るだけではだめ。 • 現状では難しいが食生活改善グループ、みちくさ市グループなどが中心になり農業に軸を置いた地域づくりが出来ないだろうか。今ある町づくり推進委員会の今後が楽しみ。町民会議などを通じてやれば可能。
<p>町に住む多くの人に関わった町づくりに参加する気持ちはあるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 回答：ある：10 ない：1 • 江府町の自然を大切に、故郷を大切にしながら地域づくりに取組んでほしいと思う。きっかけがあれば皆さん参加可能と思う。 • 町づくりの資源はあるが町民の自信、アイデア、チャレンジ精神に欠ける。 • 自分たちの町だから自分たちで出来ることはしたい。 • この町に誇りが持てない。むしろ嫌いだ。改善したいと思っている人と本気で話し合いたい。 • 高齢者が生き生きとした活動出来る町にしたい。その意味からも高齢者にも出来れば参加したい。
<p>江府町には持続的な町づくりに必要な資源があるか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 回答：ある：11 ない：4 • 人・土地・山・川・自然・森林資源・水 • 豊かな自然とそれを大切にしている人々の心 • 観光資源と付加価値を付ければ有望な農産資源 • 炭づくりに取組んでいる地域があるがこの集落だけでなく町の取り組みにしてはどうか。
<p>江府町で活用できそうな再生可能エネルギーはどのようにして取組めば良いか。</p>	<p>風力：6、太陽光：12 小さな小川の流れ：10、廃木材：6 家畜糞尿：2、家庭の廃棄物：9</p> <ul style="list-style-type: none"> • 他の地域での取り組みを確認し、町でも出来るエネルギー政策を導入。 • 屋根を利用した太陽光発電・地域で小川を利用した発電をしたい。 • 間伐材を利用したりするためには地元の建設業者などの異業種参入による取り組みが出来るよう行政が積極的に提案したり支援する。 • 自然や地形を活かした町の目玉になるような取り組みがしたい。 • 行政と住民が両輪になって今ある町づくり推進委員会が取組めばと思う。

(4) 「江尾商店街を考える」と題した商店街住民とのワークショップの開催

(1) 開催日：2005年12月1日

(2) 当方からアンケート調査結果を報告

(3) 当大学4年生が広島県廿日市での取り組み（住民が考えるまちづくりの進め方）の事例を報告

(4) 住民から得た主な意見

- ① 研究の成果はアンケート回答者には報告してほしい。また町民に提案もしてほしい。
- ② 町の外から揺さぶってほしい。
- ③ 合併しなかったことで今後大変なことが多いと思う。でも合併すれば合理化の名

のもとでの一極化が進んだと思う。単独選択が良い結果になることを願っている。

- ④ 新エネルギーも大切だが登校拒否児童の受け入れ学校を作るとか DV で傷ついたひとの受け入れ施設づくりとかが大切と思う。
- ⑤ 東京に出ている息子たちが帰りたくなるような魅力ある町にしたい。
- ⑥ 奥大山の観光資源と水を生かしたい。

などの意見が出された。

(5) ま と め

- 1) テーマ1：江尾商店街が活力を持ち魅力的な街になるための素材探しと基本構想検討
 - ・人口の減少・高齢化・後継者不足・通販の普及など社会的現象の影響を大きく受けている。
 - ・車社会になったにも関わらず、商店街の構造改善が遅れている。
 - ・商店街の努力、連携、経営改善意識が低くあきらめにも似た状況にある。
 - ・商店街に若い息吹と活力が不足している。などの問題を抱えている。
 - ・しかし、何とかしなければという思いも強い。外から刺激を与えるなどのきっかけがあれば活性化も不可能ではない。
 - ・大山の源流水から醸造される地ビールや地酒、そばなどすでに試行されている地域ならではの素材の活用が必要と考えられる。
 - 2) テーマ2：地球温暖化対策を目指し、江府町で利用可能なエネルギーを活用した活力ある町づくり
 - ・自然豊かな地域で営む農産資源が豊富である。農業と観光を結びつけることが最も重要と思われる。
 - ・町の一部地域は、国立公園にもなっており、これらをからめた計画づくりも必要と思われる。
 - ・森林資源が豊富であり間伐材などの活用が可能である。また、落差の大きい小川や風力、太陽光、家畜糞尿などを活用すれば町のエネルギーをかなりの割合でまかなうことも可能である。その結果、持続可能な地域社会づくりのモデルにもなりうるものと思われる。
 - ・子供の将来を心配し、地球温暖化問題を真剣に考えている子育て中の母親の活力と役場で問題意識を持ちながら地域社会のしがらみに悩んでいる若い世代の活用が必要であろう。
- なお、本研究の結果は江府町役場と江府町商工会に提出した。

<参考文献・資料>

1. 江府町総務課「江府町勢要覧」
2. 江府町総務課「第3次江府町総合計画」

3. 江府町産業振興課グリーンツーリズムモデル地区育成振興協議会「チロルの里構想」
4. 江府町総務課地域新エネルギービジョン策定委員会（委員長筆者）
「手づくりエネルギーの里江府町」
5. 江府町ホームページ <http://www.town-kofu.jp/>
6. 環境省企画調整局里地研究会編「里地からの変革」時事通信社
7. 渡辺俊一編著「市民参加のまちづくり」学芸出版社

3. 竹原市における観光資源としての『町並み保存地区』の現状とその根本的問題

(1) 竹原市の観光資源活用の現状

今回、竹原市の『町並み保存地区』を観光資源の核とした、竹原市の持続可能な発展について、2004～2005年度に広島修道大学総合研究所の調査研究費を得て取り組んだ結果を論文としてまとめるにあたり、今一度、現状を確認するため竹原市の『町並み保存地区』を訪れた。そこで得た印象は、2年前に調査研究を行った時と変わらないもので、むしろ、さらに状況は悪い方向に向かっていると感じた。すなわち、まちが有する観光資源を磨き輝かせることができずに、次第に観光資源としての価値を低下させ、廃れつつあるということである。

竹原市のHPを見るとトップに下に示すようなバナーが表示され、“安芸の小京都”ということを出して竹原市の魅力をPRしており、「市の施策」や「協働のまちづくり」といった項目よりも前に「観光・イベント」が表示されている。さらに、このトップページは竹原の魅力を紹介するページ（竹原観光・イベント情報）にリンクしており、ここでは「江戸時代の息づかいが聞こえる 町並み保存地区」というビデオを観ることができるようになっている。観光スポット案内のトップは“小京都の町並み散策”である。

このように、“小京都”という言葉で一般的にイメージされる観光資源を大きなまちの個性、核として捉えているのであるが、現状は厳しいものといわざるを得ない。



内閣官房地域再生本部（平成19年10月9日の閣議決定により、地域活性化関係の4本部＝都市再生本部・構造改革特別区域推進本部・地域再生本部・中心市街地活性化本部）はが

同で開催することとなり、「地域活性化統合本部会合」となった)の地域再生の構造改革特別区域への申請に提出された竹原市の「地域再生計画」を見ると、次のように記述されている。

‘本市の代表的な地域資源としては、瀬戸内海国立公園に指定された大久野島や江戸時代から塩田経営や廻船業など瀬戸内海を背景として栄え、当時の賑わいの姿を残し、国の需要伝統的建造物群保存地区に指定される上市・下市地区の「町並み保存地区」などがある。(略)町並み保存地区については、観光の目玉として活用が期待されており、町並み保存地区での飲食や買い物、だれもが立ち寄れるギャラリーなどの整備により、新たな賑わいの創出が必要になっている。’

‘(略)近年、本市の観光の動向をみると、観光入込客数は、平成15年は年間51万2千人であり、ほぼ横ばいで推移しており、停滞感がある。このような状況の主たる原因は、地域資源の観光利用が単発となっており、各資源の有機的な連携ができていないため、多くの観光客は日帰りでの来訪となっており、宿泊などを含む長期的滞在客が少ないため、観光による経済的な波及効果が小さいという点にある。’

‘一方、本市の重要な観光資源である上市・下市地区の町並み保存地区は、歴史的建造物とそこにある生活文化を複合的に活かしたまちづくりが図られているが、その昔ながらの町並みの維持・保存の必要性から、道路の狭隘さ、下水道整備の遅れなど、生活環境の利便性向上が図りにくく、地域住民の高齢化もあいまって、伝統的建造物の所有者の転居などによる空き家の増加が顕著するなど、地域コミュニティとしての空洞化が進み、それに伴い、観光資源としての価値も低下するなど、町の崩壊の危機に瀕している。’

‘町並み保存地区の維持・保存は、コミュニティ維持という観点に加え、観光資源としての利活用をあわせて進めることが重要であり、そこで暮らす地域住民にその価値を再認識してもらい地域アイデンティティの確立を図るとともに、多くの人が訪れることを地域住民が誇りとし、賑わいと豊かさを再生する取り組みが求められている’

以上の計画書の記述からも推察できるように、観光資源として『町並み保存地区』を活用して長時間滞在する観光客を増やし、経済的な波及が生じることを望んではいるが、それが様々な問題からうまく進んでいないことを、竹原市自体も認識している。

そのため、構造改革特区の規制の特例措置により、まず、「観光地宣言！事業」として、観光地としての自覚とおもてなしの心を醸成し、さらにそれを対外的にPRし、また施設整備等の受入体制の充実を図る、としている。メンタリティー面とハード面からの改革である。

そして、次の支援措置を求めていた。

- ・地域再生支援のための「特定地域プロジェクトチーム」の設置（NPO との協働）
- ・映画ロケ、イベント等およびカーレースに伴う道路使用許可の円滑化
- ・民間事業者等の経済活動に伴う道路使用許可の円滑化

- ・ 道路使用許可・道路占有許可の手續改善
- ・ 案内標識に関するガイドラインの策定

私が竹原市で調査研究を実施した後にこれらの取り組みが、「自然・まちなみ再生特区計画および竹原にぎわい観光再生計画」として行われたことから、調査研究当時とは情勢が異なっているものと思って再訪したわけであるが、これらの取り組みによって、観光客数増加と滞在時間の延長による観光産業の発展（計画では、平成20年には入り込み観光客数は平成15年から約20%増の60万人、観光消費額も20%増の27億円を期待）を見出すことはできなかった。再訪したのは初秋の日曜日の午後であったが、『町並み保存地区』を訪れていた人々の数は、私が滞在した約1時間で10数人であったし、新たな飲食店や物品販売店、ギャラリーも見られず、地区に居住する人々と来訪者との交流も見られなかった。

結局、この計画で考えられた取り組みでは、新たな賑わいの創出や観光客数・観光消費額の増加はできなかったのである。

では、どうすれば、この歴史的価値のある『町並み保存地区』という観光資産を活かした“まちづくり”が行えるのであろうか。

私は、そこには、今の“人々の営みの見えない過去の遺産としてのまち”から、“伝統のあるまちを愛し、守り、楽しむ住み手との交流によって楽しみを創造できるまち”への変革が必要と考える。これについて、以下に、その理由を述べていく。

(2) 観光面からみた「たけはら町並み」の歴史、概要

1) 歴史

竹原市は広島県の中央南部にあり、中国・四国地方の中心に位置する。北部の三方は針葉樹の少ない紅葉樹林の自然林豊かな山に囲まれ、南は多島美を配する瀬戸内海に面している。市域の約70%は山林で「自然の恵みが豊富な水」を生む。

竹原は塩田で栄えた「旦那衆の町」である。江戸正保3年（1646年）から寛文1年（1661年）にかけて、干潟となった竹原湾の新開拓地化が進んだ。新開の南は塩分が強く耕作に適さなかったため、慶安1年（1648年）塩田を築堤した後、芸備一の製塩地として発展した。町人の中には、塩田経営の他に廻船業や酒造業などを兼ねる者も増え、経済の発展は雇用の増大、人口の増加をもたらした。市街地にも広がり港町として賑わいをみせた。安政年間に竹原に移住してきた茶人、不二庵は、それまでの重厚で素朴な家を、茶室と庭のある数奇屋造りとし、竹原の町並みに格調高い雰囲気をもたらした。

昭和5年（1930年）、第一次塩田整備により、国鉄呉線竹原駅や昭和鉱業竹原精煉所（現三井金属鉱業）が建設され、市街地も移動、昭和36年（1960年）塩田前面整備により、約300年の製塩地としての歴史が幕を閉じることになる。その跡地に官庁街、商店街、住宅地が移

動したため、近世の中心地はそのまま温存され、『町並み保存地区』として静かに佇んでいる。「保存地区」は町の東側、寺山の麓、通称本通り（上市・下市、約 400 m）を中軸とした約 5 ヘクタールの地域である。

2) 概 要

昭和57年（1982年）12月に「竹原地区重要伝統的建造物群保存地区」として選定を受けた。竹原の町並みは、塩田経営を生業としていた時代の特徴をよく残している。

- ① 一筋の街から二筋へ、L字型へ十字型へと街路空間に自然発生的都市の発展経過をよくとどめている。
- ② 町並みの中には、母屋、座敷、倉を重ねた多棟連結型、座敷型、独立型、長屋型など、江戸中期から現在に至る多様な建築がみられ、また町中にある、胡堂や地藏堂、東側の中腹にそびえる普明閣や照蓮寺、西方寺の寺院建築など、それらが一体となって立体的な町並みを構成している。
- ③ 中心通りである本通り、脇道の大小路、板屋小路、中の小路など、それぞれ個性をもった伝統的街路空間の地区の組み合わせが地区に変化と深みを持たせている。
- ④ 江戸中期から昭和初期に至る伝統的な意匠を持った町屋が多く残っている。三間間口の妻入切妻造の町屋、入母屋造のもの、平入の大型町屋、高塀と倉を持つ座敷型、長屋門を持つ武家屋敷風のものもある。屋根は本瓦葺きで、塗籠格子や木格子の二階、一階の全面の平格子や出格子など各家で個性をもっており、外壁も白漆喰、灰漆喰、中塗だけのもの、あるいはうぐいす色の漆喰など色彩も変化に富んでいる。
- ⑤ 町家の中にも、優れた建造物がいくつかある。伝統的建造物として特定された建築物は、江戸時代から昭和初期までに建てられた家屋、蔵など、137棟および堂2棟、また伝統的建造物と一体をなして歴史的景観を構成する工作物として、塀24面、井戸一基がある。

伝統的建造物（建築物）132棟 <平成10年（1998年）5月現在>

地区内全建造物数 372棟 <平成10年（1998年）5月現在>

3) イベント、まつり（町並み保存地区周辺）

● たけはら竹まつり

5月3～4日 町並み保存地区・小梨小学校

和服の竹原娘やたけはらかぐや姫が接待する「ガン封じ笹酒の振る舞い」、竹細工教室、たけのこ料理、たけのこ狩りなど「竹」をテーマに様々なイベントが催される。

● たけはら七夕まつり

7月7日 竹原駅前商店街（竹原中央1丁目）

市内の企業・団体・子ども会によるユニークな七夕飾りを商店街に飾り付ける。ステージ

ショー、露店市で賑う。

● 竹原住吉まつり

7月30～31日 住吉神社一带（本町一丁目）

江戸時代から続く伝統的な海の祭り。本川沿いに子供提灯が並び、權伝馬、神輿渡御、団扇抽選会など多彩なイベントが行われる。

● たけはら夏祭り花火大会

8月27日 大乘小学校沖（高崎町）

芸南地方最後の海上打上花火大会。約4,200発の打上花火が、夏の終わりを彩る。

● たけはら憧憬の路

10月第二週の土日 17:00～21:00 町並み保存地区一带（本町三丁目）

江戸時代の繁栄を今に伝える古い町並みを竹筒からあふれるろうそくの灯りで幻想的にライトアップする。

● 毎日開催／安芸の小京都・たけはら町並みテーリグ（町並み保存地区）

● 長生寺のミニ八十八ヶ所めぐり

● 4月の第1日曜日／頼山陽まつり

● 5月3日4日／たけはら竹まつり（町並み保存地区・小梨町小吹）

● 6月 木造十一面観音菩薩立像（県重要文化財）ご開帳の日／普明閣縁日行事

● 7月中・下旬／住吉まつり（住吉神社）

(3) 竹原市の現状と課題（人口・商業・観光）

上記したように、竹原市の人口は減少傾向にあり、中心市街地の空洞化が懸念されている。また高齢化、少子化も進んでおり、竹原で生まれ育った若い人々は進学や仕事などで都心へと移り住む傾向も強いようだ。

卸売業、小売業ともに販売額の面では増加しているが店舗数は減っている。竹原市内には8つの商店街があって、主に中心部の商店街として竹原駅前商店街・中央商店街などがあげられるが、大型のショッピングセンターが近隣に参入し利用客は便利さなどからそちらに流れてしまっているのが現状だ。大型店は中心部に3店舗、市街地外に1店舗立地している。

竹原市の観光における来客数は毎年ほぼ横ばい状態である。その観光客もほとんどが数時間程度の滞在である。メインで竹原の町並みを散策しにきた、というよりも団体旅行などの立ち寄り観光や日帰り旅行客ばかりだ。

まちづくりにおいて市民・行政・企業・地元事業者などが一体となって、まちに人を呼び込もうと様々な施策を打ち出し、打開策の提案・実行をしているが十分な成果は得られてい

ないようだ。

課題は多く残されたままであるが、竹原市のもつ歴史資産を活用し賑わいのあるまちを取り戻すには、まず、それを取り巻く周囲の環境を整備しなくてはならないと考える。いくら素晴らしい景観をもったまちでも、そこに住む市民が住みやすく来訪者にも親切な空間を提供しなければ、また訪れたいと思ったり、このまちに住んでいてよかったと思えるようにはならない。このことをふまえ、私は竹原市における課題は以下の4点に集約できると考えた。

・ アクセスのわかりにくさ、案内看板の不足

観光の要である『町並み保存地区』。そこに初めて訪れる人々の多くは道に迷うことになるだろう。JR、またはマイカーを利用して保存地区へ行こうとした場合、駅から保存地区までのルートがわかりにくい、マイカーの場合駐車場の位置がわからない、などアクセスにおいての案内看板の不備が指摘される。またアンケートによる住民の声にも、「毎日のように道を聞かれる」「観光の順路の案内看板があればいい」などの意見があがっている。

・ 休憩所・飲食店など滞在する場所が少ない、わかりにくい

保存地区内には食事を楽しむことができる場所、古い民家や醤油醸造蔵を改装し、お酒の試飲ができる場所などある。しかし、歩き疲れて「一息つきたい、少し腰を掛けたい」と思った時の休憩スペースがない。これは保存地区へ行くまでのルートにも共通して言えることである。

・ 『町並み保存地区』と商店街との連続性が欠けている

竹原市の観光のほとんどが立ち寄り観光と日帰り観光であると上述した。なぜそのようなになってしまうのか。1番の原因は観て回るだけの観光になっていて、しかもその観る箇所も少ないということにある。中心商店街は平日だけでなく休日でもひと気は少なく閑散としている。商店街と町並み保存地区が連動すれば来訪者の観る範囲も広がり、観る観光だけでなく、そこに買物や飲食といった活動する楽しさにも加わる。

この連続性については次の章で詳述する。

・ 訪れた人に親切なまちとなること。まちづくりの積極性がない

現地調査を行って実際感じたことの1つに、来訪者を積極的にもてなそうという意識があまり感じられなかったことがある。比較対象として訪れた京都や尾道では町全体が観光に力を入れていて、「わたしの住むまちステキでしょう！たくさん楽しんで帰ってね！」と言わんばかりの雰囲気はひしひしと伝わってきた。しかし竹原にそのような雰囲気は感じられな

い。決して住民が来訪者に対して無愛想であったり無関心であったりというわけではないのだが、竹原の場合その「地域再生計画」の中で示されている“もてなし”が来訪者に伝わる雰囲気がない。

(4) フィールドワーク・現地調査の結果

JR 竹原駅から観光の主要資源である『町並み保存地区』までルートに連続性がどれほどあるのかを確かめるため、フィールドワークを行った。まちを知るのに、現地・地図・自分の頭の中のイメージの3つを一致させたり連動できたりすることが大事である。現地をつぶさに歩き回り、それによって頭の中の地域像を形つくっていき、地図をもちいて現地の状況をチェックしたり、イメージを書き込んだり、新たな発見、気になる箇所などの事項を地図に書き込み“フィールドノート”として作成した。

【行きのルート】

① 竹原駅

駅の構内には観光パンフレットが2～3種置いてあり、出て右手に観光案内所がある。ひと気はあまりなく閑散とした様子。(尾道であれば、観光案内ボランティアの方が駅前において気軽に話しかけてきてくれた。)観光地にきたというよりも、田舎に帰省した時のような懐かしさを感じた。

② 駅前商店街(あいふる365)

商店街は空き店舗や閉鎖された店舗が目立つ。宝石・眼鏡店やパチンコ店、洋服雑貨店、文具店など営業中の店舗はあるが、人通りはかなり少ない。商店街の中央部分はほとんど駐車スペースとなっている。(写真-1)



写真-1

JR を利用して『町並み保存地区』を訪れる人はこの商店街を通して『町並み保存地区』へ行くが、その行きかたはわかりにくく、案内看板もない。(写真-2 は実際に目撃した観光客が商店街の人に道を尋ねている様子)



写真-2

途中の文具店では市観光協会が大手化粧品メーカーの協力で開発した竹の成分入り香水「竹原オードパルファム」を試し、ほかにはない香りを楽しむことができる。竹原市の木である竹にちなんだ香水は化粧瓶(30cc)入りで2100円。竹まつりなどのイベント時に売り出された。その文具店の手前、ちょうど商店街の中央部あたりに WC の看板を唯一発見した。その矢印通り左へ曲がるとトイレは公園内に設置されたものであった。(写真-3・4)



写真-3



写真-4

また、その公園の近隣の飲食店で昼食をとることにしたが、外から店内の様子がわからず、少し入りにくい雰囲気。店の前にその店の看板メニューを置き、大よその価格設定がわかれば、初めての人や観光で訪れた人でも入りやすくなるのでは……？と思った。商店街にある他の飲食店でも同じような様子で、観光客など新規のお客さんを積極的に増やそうというよりは、地元の常連のお客さんを相手にしているといった雰囲気を感じ取った。

③ 地球生活支援センター365サテライトを右折

ここからまったく案内看板がなくなってしまった。(写真-5)



写真-5

おそらくこのルートが『町並み保存地区』までの最短ルートであると思う。商店街を1本外れた道にでると『町並み保存地区』との境界となっている川を渡るまでに5つしかお店は開いていなかった。しかしその中の1つの玩具店はかなりレトロな雰囲気があり、ガチャガ

チャや駄菓子など街なかではあまり目にするものがない、このような場所ならではのものが売られていた。地元の子供たちが何人か入っていったので、たまり場的な場所になっているのではないだろうか。店主らしき年配の女性がストープにあたりながらにこにこしている姿には懐かしさと温かさを感じた。(写真-6)



写真-6

④ 町並み観光センター

竹原市の特産のお菓子や竹細工など販売しており、『町並み保存地区』の案内パンフレットが置いてある。その場所にいた地元の人に話を伺ったところ『町並み保存地区』内での見どころは、普明閣で眺めが良いこと、おかかえ地蔵、松坂邸ということであった。センター内はあまり広くなくこじんまりしているが、お店の方は親しみやすく、自転車も無料で貸し出してくれる。しかしその利用者は少ないようで『町並み保存地区』でレンタルの自転車に乗っている人は見なかった。また自転車を利用するほど見て回る箇所は多くないのでは……と思う。

⑤ 『町並み保存地区』入り口

橋に看板はかかっているが、ルートがわかりにくく感じる。うろうろしていると通りすがりの人が案内してくれた。もっとルートをわかりやすく提示するべき。ただ、たんに矢印で方向を指示するだけでなく、あと何分・何歩やちょっとしたクイズなど楽しみを加えつつ案内してはどうか。

『町並み保存地区』専用の駐車場が徒歩3分ほどの場所に設置されていた。3時間で300円。駐車状況はタクシーが2～3台と普通車が停まっていたが、観光客が利用しているという様子は感じられなかった(写真-7)。



写真－7

⑥ 『町並み保存地区』

『町並み保存地区』に訪れて毎回思うことの1つに自動車の乗り入れがある。メインストリートの石畳の上をのんびりと散策していると、自動車が後ろや前からかなり頻繁にやってくる。それもあまりスピードを緩めないで。保存地区内にも多くの人が住んでいて、道路や車は生活の重要基盤であることは間違いないのだが、年配の方や車椅子などで訪れた人には少し危険だと思う。

保存地区内は、近世中期の町並みが7割方残されていて、ノスタルジックな旅情をかきたててくれるが、その歴史ある町家の中には入れず外からしか見られないことが多い。町並み観光センターの方のオススメであった、松坂邸は竹原の町家の中でも一番華やかで当時の造りを色濃く残しているが、入場料が200円かかる。NPO法人“ネットワーク竹原”の活動拠点となっている笠井邸（ここはイベント時には一般に開放し、中を見ることができる）や吉井邸（本陣跡）、春風館などには平素入ることはできないようだ。古い町並みが好きで見学に来た観光客には少し物足りなく感じるのではないだろうか。次の表は保存地区内にある施設の所有者と入場の際にかかる料金を表したものである。

施設の概要

施設名	所有者名	備考
松坂邸	竹原市	公開・有料
町並み保存センター	竹原市	公開・無料
歴史民族資料館	竹原市	公開・有料
修景広場	竹原市（借地）	公開・無料・竹工房含む
町並み観光センター	竹原市	敷地一部借地
春風館	頼家	非公開
復古館	頼家	非公開
頼清旧宅	頼家	公開・市教育委員会管理
光本邸	竹原市	非公開・未利用

メインストリートの入り口付近に面白いものを発見した。全身木目調に覆われた自動販売機。『町並み保存地区』の風景に合わせて設置されたものなのか。面白いと思うがジュースの売れ行きも気になる場所……。また電柱電線は地下に埋設されていて、こういったところも非日常的な感覚をかきたててくれる。

⑦ 普明閣

地元の方オススメ No.1であった普明閣からの眺めは市内を一望できなかなか気持ちの良い場所。京都の清水寺の舞台を模して建てたと伝えられているが、清水寺とは比べ物にならないほどこじんまりしている。“時をかける少女”という映画のロケ地らしいが、私が持っていた観光パンフレットにはその情報が示されていなかった。尾道の様にロケ地の情報を提供すれば映画を観て訪れた人ならば2倍楽しめるのではないかと思う。

⑧ 町並み観光センター

車椅子用のトイレがあり、わかりやすい案内もある。入場無料、冷暖房完備で休憩できるスペースがあり、スライドショーを見ながら竹原市の歴史学習ができるので観光客にやさしいスペースであると思った。

⑨ まちなみ竹工房～おかかえ地蔵

竹文化振興協会の会員の方が竹かご、置物など竹の工芸品作っているところを見学し、購入することができる。また竹工芸の体験コーナーもあるようだが、実際予約なしでもできるのか、購入しなければ入れないのか、などパンフレットや案内地図に情報が少なくわかりにくい。せっかく竹原の伝統工芸を身近にふれることのできるチャンスであり、興味のある人も多いかと思うが、いまひとつ開放しきれてない部分を感じとった。

そこを曲がったところにおかかえ地蔵が祀られてある坂への道がある。まちなみ竹工房の裏のスペースは水道やベンチがきれいに整備されており、ここも天気がいよい日には休憩所として活用されそう。かなり急な坂道に地蔵は祀られているのでお年寄りや車椅子利用の方にはきついかと思う。女性はこのような“願いがかなう〇〇”といったフレーズに弱いので、私はおかかえ地蔵の存在をパンフレットなどによりもっとアピールしていてもよいと思う。そばに「お願い事帳」のようなノートとペンが用意されていてたくさん記入があった。(写真-8・9)

⑩ CozyCafe

大崎上島にある広島商船高等専門学校情報工学科の学生が開いているカフェ。カフェは長年空き家になっていた保存地区北側の胡堂に近い木造2階建ての町家を借り、2005年5月上旬にオープンした。店名は、英語で居心地のよいカフェを意味する。発案者は、ゼミ担当の岐美宗助教授。二年前から竹原のまちづくりにかかわるうち、歴史的町並みの活用や空き家の課題を知った。一方、実践的な学習の場を探していた経緯もあり、両方のニーズを満たす



写真-8



写真-9

実験店舗を考えたとのことである。2005年1月、学生の金原沙織さん（19）ら男女5人が手を挙げ、2月から準備に入った。会計、仕入れ、広告などの担当を決め、保存地区で観光客にアンケートをしてメニューを検討。大崎上島の農家から特産のミカンを提供してもらい、竹原市内のパン工房からも商品の仕入れを決めた。今のところ、来店者は1日平均約40人。「販売数を予測すること、同じ味を保つことが難しい。地域の皆さんの助言も聞きながら、いい店にしたい」と金原さんは笑顔を見せる。5人の取り組みに他の学生も賛同。また、空き部屋で勉強を教える「寺子屋」をスタートさせ、小学生の宿題を手伝った。同校ハンドベル同好会の演奏会も開く。「学生には現場で学び、まちづくりの一員になってほしい」と岐美助教授。近くに住む上市自治会前会長の西田彦三さん（80）は「若者が出入りして雰囲気明るくなり、喜んでいます」と話している。（中国新聞2005.6 抜粋）

私がお店の前を通りがかった時にはお客さんがひとりも入っていなかったが、すぐ後ろを

歩いていた観光客が「ここでコーヒーでも飲もう！」といて、4～5人で店の中へ入っていると、中から「いらっしやいませ～！」という元気な声が聞こえた。入り口はオープンになっていて店内の様子がよくわかるし、お店の前にメニューのパンフレットやイベントの情報など、かわいらしいレイアウトで書かれてあったのでとても親近感がわいた。観光客だけではなく、地元に住むお年よりや子供たちまでも巻き込んで協力し育てていくお店になれば、地域のコミュニティーもさらに広がっていきだろう。地域の特産物の大長ミカンやブルーベリージャムも販売され、カフェメニューの価格設定も良心的である。このカフェが『町並み保存地区』に新しい風を吹き込ませたことに間違いはない。

⑪ 酒蔵交流館

お酒の試飲ができる。江戸末期、古くからある酒蔵の一部を改築し、太い柱、天井のハリが130年もの歴史を物語っており薄暗くとても趣がある。平日だったためか館内に人気はなくひっそりとしていたが、奥に食事ができるところ、お酒の販売コーナー、観光客用の休憩スペースもありひとやすみできる。入場も無料なので気軽に立ち入ることができる。また酒蔵の中のスペースがかなり広いこともあって、たけはら憧憬の路の時には、竹で作った楽器を演奏披露するホールとしても活用されており、多くの人で賑わっていた。ここから先はほとんど住宅地となっていて、観光の主な見どころはこのあたりまでか……。

【帰りのルート】

① 楠神社前～住宅地

JR 竹原駅前まで、行きとは違うルートを通ってもどることにした。広島銀行竹原支店前を通り犬の美容室の前を右折福屋竹原店沿いの大きな道路を歩いて駅前商店街へと入った。商店街へ入るまでは本当に何の変哲もない住宅地であった。どこにでもある風景で、『町並み保存地区』が非日常的な場所ただだけに、日常のありふれた様子に歩いて回った疲れが倍増する。特に気になったのが空き地の多さである。駐車場としてのスペースも含め、なぜこんな広い土地が大通りに面しているのか、とても気になった。また自分の持参していた地図に記載されている店舗を实际照らし合わせながら歩いてみたが、あまり見あたらず、閉店しているところ、やっているのかやっていないのかわからないようなところが多かった。

② 商店街入り口

商店街の区域図を発見した。(写真-10)

これを見るとかなり多くの店舗がひしめきあっているようにみえる。しかし JR 竹原駅から左手の大きな道路（国道432号線）には、大型のショッピングセンター、家電量販店が面しており市民は利便性を求めてそちらを利用している。またこの国道432号線沿いには竹笹を使用した並木道があり、かぐや姫をモチーフとしたユニークな公衆電話なども設置され



写真-10

ている。しかし、駅から『町並み保存地区』へのルートとは逆の方向に設置されているため、車を利用して訪れる観光客の目にはとまるかもしれないが、歩いて散策するつもりで来訪した観光客は、見ることに、あるいは知ることさえできずに帰ることになる。

フィールドワークの結果、駅前商店街から『町並み保存地区』の連続性はほとんど皆無に等しいと判断した。建物が取り壊され駐車場や空き地になった箇所が大変目立った。その結果、歴史的な文脈が冷ややかに分断される。店をたたんだ商業店舗もあり、駅前からの衰退は地区全体の活気を喪失させている。案内看板、観光パンフレットはその目的を十分に果たしておらず、来訪者にとって親切であるとは言えない。また、町全体が来訪者の受け入れにかなり消極的である印象を受ける。商店街は地元住民だけのため、ではなく他方の人をも受け入れるような取り組みが必要だ。賑わいが無い。力を入れるべき改善点は、来訪者が竹原に観光を目的として訪れた場合いかに良い印象、新たな発見をもって帰るか、また来てみたいと思わせるかにあると思う。

(5) 観光案内パンフレットの比較（グルメパンフレット編）

次に観光の手引きとなる観光案内パンフレットについて取り上げる。町並みを散策する際もっとも手助けになるのが、案内パンフレットである。その地域ごとに様々なパンフレットが存在し、それぞれ工夫を凝らし、その土地の歴史、情報など良さをアピールする重要なものだ。パンフレットひとつでそのまちの印象が決まるといっても過言ではない。

その中で、私が竹原の観光資源として少し弱いと感じる“グルメ”飲食店マップをとりあげ、近隣であり観光都市として成長を続けている尾道市と比較して竹原に欠けているもの、取り入れたら面白いと思ったものを考えた。

	おのみち	たけはら
表題	グルメマップ	うまいもんまっぷ
企画	グルメスタンプラリー	特になし
イベント	グルメ・海の印象派 おのみち	掲載あり（グルメイベントとは関係ない）
情報	尾道 旬の味	特になし
店	86	32
アクセス図	掲載なし（わかりにくい）	掲載あり
名物	ラーメン・お好み焼き・魚	特になし

・企画

（おのみち）……グルメマップ参加店舗で500円ごとにスタンプを押してもらえる。スタンプが10個そろったら、ハガキを送る。抽選で参加店共通の1万円、5千円のお食事券がプレゼントされるというもの。頻繁に訪れる観光客には、とてもうれしい企画であるし、また地元の人々も活用すれば、ますます地元の飲食店は発展するだろう。

（たけはら）……特にそういった企画はなく掲載はなかった。

・イベント

（おのみち）……第17回グルメ・海の印象派 おのみち

- おのみち味めぐり（どんぶり・弁当・コース料理）
- 食談・おいしい店のイベントめぐり
- おのみち美食市
- おのみち菓子まつり
- おのみちグルメスタンプラリー など

秋に行われる“食”に関するイベントは多々開催されているようだ。詳しい場所や時間帯などの掲載はないがグルメマップの中の参加店とともに尾道を盛りたてる要素となっている。

（たけはら）……特に“食”に関するイベントはない。年間を通じての竹原市、大崎上島のイベントの掲載はある。

・情報

（おのみち）……情報として尾道の近海でとれる新鮮な海の幸を紹介している。海の幸の旬とそのおいしい食べ方（例えばアナゴ、真ダコなど。）尾道の方言紹介もある。海が近いだけあって新鮮な魚介類が楽しめることは尾道の大きな魅力のひとつとなっている。

（たけはら）……特になし メインとなる名物料理がハッキリしないところが厳しい。

たけのこ料理??

・ 店

(おのみち)……86店舗 向島地区、ホテルやナイトスポットなども含め86ものお店の情報が掲載されている。和食・洋食・ラーメンなどタイプごとに区切られているので、とても見やすい。また広いマップ上で店を探すのは少し困難だが、店名紹介のバックの色はマップの同じ色のエリアにあり、番号で照らし合わせ、番号も色分けされていて見やすい工夫がしてある。

(たけはら)……32店舗 忠海地区、大崎上島もあわせて32店舗が掲載されている。これはかなり少ない。もっと喫茶店、ベーカリーなど様々な食に関する店舗はあるはずなのに、なぜ掲載されていないのか。また店同士がかなり離れた場所に位置していることや、『町並み保存地区』とは離れた場所にも多くお店があるため、なかなか訪れた観光客はそこまで足を伸ばそうという気にはならないのではないか。単純にグルメマップだけに力を入れる場合はそのようにしてもかまわないであろうが、『町並み保存地区』との連携をもとにしたグルメマップの場合には、もっとその周辺の店舗の掲載をすべきだと感じる。ただ、店1つ1つの外観や店内の写真が店の紹介と一緒に見られることは店の雰囲気をつかめるし良いと思った。

・ アクセス図

(おのみち)……尾道に行くまでのアクセスや向島への行き方についてはあまり詳しい説明はなかった。しかしマップ自体にはトイレ・休憩所・駐車場の位置確認が簡単にできるようになっていて、街全体のマップとしても見やすかった。

(たけはら)……広島空港からのアクセスや高速道路利用の場合、大崎上島へのフェリーを使ったアクセスが何分かかるかなど裏面の大きな地図でわかりやすい説明があった。しかし表面のグルメマップ自体はかなり大雑把で、特にトイレや休憩場所などの案内もなく少し見にくく感じた。

・ 名物

(おのみち)……全国的に有名になった尾道ラーメン。グルメマップに掲載されているだけで23ものラーメン店、中華料理店がある。価格も良心的なので色々な店をまわり好みの味を見つけることができる。またそれがリピート率を高めることにもなるだろう。その他、尾道風お好み焼き・オコゼの唐揚げなどを写真を載せてアピールしてある。

(たけはら)……特に名物としている食べ物はない。飲食店も居酒屋や食堂などバラバラで統一性がない。

観光案内マップ全体を比較して尾道にあって竹原にないものは「期待感」と「親近感」である。パンフレット内では、飲食店や観光名所の宣伝、アピールはとても重要な要素である。そのパンフレットを手にとった来訪者がこの場所へぜひとも行ってみたい！と思わせるよう

なわくわく感を感じられなければパンフレット作成の意味はない。単なる“観光案内，歴史紹介”ではだめなのだ。例えば，尾道の場合飲食店や観光名所の宣伝をもちろんしつつも価格帯，どのような人がお店を経営しているのか，その歴史などその店，その場所の云われが詳しく説明されている。また尾道には，あまりたいしたことではないのだが，「世界一」や「日本で一つ」のものや場所がある。日本で一つしかないクレーン付きの公衆電話や世界一低い郵便受けなど。これらは親近感へとつながると同時にそれが本当なのかということを確認する期待感にもつながり，まちめぐりが一層楽しさを増す要素となる。

(6) 観る観光主体のまちから自発的なまちへ

近年，観光ニーズが多様化する中，自発的に新しい発見を求める体験観光が注目されている。今後は，自由時間や余暇を有効に使う能力を開発されたいわば多趣味で遊び上手な観光客が増加し，高度な知識が求められ学習や体験のできるような観光へのニーズがますます高まっていくように予想される。旅行のありかたも今後，個人でゆっくり楽しむタイプや同好の人たちによるグループの旅行が予想される。これらの観光客は旅先で何を求めているのか。それは「趣味的興味の充足」に関する観光なのである。その趣味の内容とは，文学，歴史，絵画，工芸，味覚，自然探索，など多岐にわたる。これらは，よりマニアックで上達志向，体験志向なのである。

【京都の例】

京都は日本の文化，伝統が今も息づく国際的な観光都市で，桜に紅葉，神社仏閣や京料理など，人々をひきつけてやまない。ここ数年，舞妓体験や座禅体験などといった，ご当地ならではの体験が脚光を浴びている。そんな折，京都の地元行政や伝統工芸団体などが組織する「京の伝統産業」観光体験推進委員会が伝統工芸の見学・体験工房の予約案内ホームページ「京都伝統工芸体験工房ガイド（通称・手習ひ）」を開設した。西陣織や友禅，陶磁器，竹工芸などの約100工房が登録され，ジャンルや地域，料金，人数などから，希望工房を簡単に検索・予約することができる。これまで敷居が高く，訪れにくかった工房も「京の手習ひ」なら簡単に予約が可能となり，グループ学習などにも最適だ。また，京都の中心部に位置する「京都伝統工芸館」に総合案内窓口を設け，電話や来館による相談も受け付けている。予約すると専任のスタッフが工房と連絡を取り，メールや電話で結果を知らせてくれる。またそのガイドの利用は無料である。

ホームページ開設以来，工芸ファンや観光客から利用に火がつき，最近では旅行会社や修学旅行などの予約団体も増えてきているという。

また，職人さんが直接宿泊施設に向く出張体験などのメニューも用意しており，京都伝統工芸館で個別に相談に応じている。職人さんの手仕事を間近で見て，また自らものづく

り体験を通じて、職業意識を身につけるとともに、思い出作りをしてほしいと、工房も修学旅行生の訪問を楽しみにしている。

今、竹原市は並み保存地区を中心に観光資源の主体が「観ること」中心となっている。しかし観光旅行の目的は、「観る」タイプのものから離れつつある。人々は「そこに何かあるから行く」というのではなく「そこで何かできるから行く」ということになってきている。人間は、一度観てしまえば、次回はまだ行ったことのない場所へ行ってみたく思うのが普通である。しかしそれが、自発的な旅行となると、まだ行ったことのない場所よりも、過去に行ったことのある勝手知った場所のほうが良いという側面も出てくる。つまりそれがリピーター率を高くなることにつながるのだ。リピーター率を高めることもこれからの観光、竹原市の観光課題の重要な部分をしめるだろう。そのためにも、訪れた人たちにいかに良い印象をもって帰ってもらうかが大事となり、前に述べた、町全体が観光客を受け入れ、親しみやすい地域づくりを進めていくことが今後の課題でもある。

(7) 提 案

以上の検討を踏まえて、『町並み保存地区』を観光資源として活用して、観光の視点から竹原市を再生させていくための提案を行う。

① 新しい観光ニーズに対応するために……タイムスリップ体験&第二の故郷づくり

数年前、<萌えるアキバが日本を変える！>と言わんばかりに、秋葉原がメディアなどで注目を浴びていた。現在、秋葉原は新しい文化の愛好家たちの聖地と化している。新しい文化のキーワードは「萌（も）え」である。もともと「燃える」という言葉の漢字変換で誤って出てきた「萌える」が徐々に広まっていったのだと言われるが、オタク、フェチ、変態といった差別的な言葉を投げつけられてきたマニアたちが「萌え」という言葉を得て、これまでとは全く異なる新しい文化の世界を創造し始めている。店員がコスプレ衣装を着用してサービスを提供する飲食店（コスプレ系飲食店）や風俗店等が続々と登場し、また女優がアニメやゲームキャラの衣装を着用して登場するビデオ等も数多く販売された。メイド喫茶、コスプレ喫茶などの飲食店産業は軒並み急成長、街にはコスプレ姿の女性がチラシなどを配り平然と存在している。このように、昔とは違い、コスプレイヤー（コスプレ行為を行う人のこと）人口は増え続けており、このような行為をする人自体に偏見の目をもつ人は少なくなり受け入れられつつある。コスプレそのものを楽しみたい、また秘かにコスプレしてみたいと感じている人は多くなってきているのではないだろうか？

また、最近、京都では、きものを着付けてもらって風情のある町並みを散策するという体験型観光が、若い人を中心に人気が高まっている。西陣織会館での、きもので京都の街を観

光できる「きもの一日散策」、どこよりもきもの似合う街京都をきもの姿で歩く体験の機会を、修学旅行生向けに提供している NPO 法人あいらぶ KYOTO、様々な民間によるきものレンタル・着付けサービス企画がある。

そこで……

現代の騒がしい町並みからタイムスリップしたような感覚に陥ることのできる『町並み保存地区』。そこにおいて、生活感のない空間であるからこそできる京都の太秦映画村のような江戸時代の歴史背景を体感できるイベントなど開催してみる。主な内容は、江戸時代のお姫様・おいらん・町娘・お殿様・銭形平次などの衣装に身を包み、楽しい扮装をする。東映太秦映画村では、変身扮装一式の価格は8,500円から16,000円とあるが、これよりも気軽に扮装できるような価格帯に設定し、人々が自由に町並みを散策できるようなシステムをつくる。記念の写真撮影をしたり、ショートムービーを撮影したりと思い出を残す。高齢者から子供まで楽しめるアトラクションを用意するなどして、まさに江戸時代を生きた人たちの生活を体験できるスポットとして『町並み保存地区』を活用してみてもはどうだろうか。

そして、来訪者が『町並み保存地区』の建物空間を現代と異なる時空間として楽しむことに留まらず、そこで今も生活している人々と交流することが、この地区に活力を生み出すためには必要であろう。京都の魅力は単に歴史的な建造物と町並み、まちなかの自然景観があるだけではない。そこでの食文化、伝統文化、産業文化、映像文化、文学などを楽しむことができることが大きな魅力となっているのである。したがって、‘小京都’として竹原をとらえるのであれば、このような京都の持つ多彩で奥深い魅力を、この竹原の地で体験、体感できるようにしていくことが必要である。

このようなその地の個性である‘文化’にふれるということは、その文化の担い手である住み手と来訪者の交流があるはずである。竹原の『町並み保存地区』で最も欠けている要素、人と人の交流を真剣に生み出していかなければ、貴重な環境資源を風化させていくだけである。人と人の交流を進めること、そのためには『町並み保存地区』での短期間の宿泊を伴う日常生活疑似体験プログラムといったものを、地区の住民が暖かく受け入れる心持ちと態勢を創り出していくことが求められる。そうすれば、来訪者は、この地区を、第二の故郷として暖かく見続けてくれるであろう。

② やさしいまちをつくる……まちに誇りをもち、おもてなしの心を育む

だれでも暮らしやすい‘まち’をつくること、それは結果として他から初めて訪れた人でもやさしく受け入れてくれる‘まち’となることであると思う。残念なことに日本の地方都市では、財政難もあって、高齢者や様々な障害をもつ方々が、自らが住む‘まち’において、自らがしたいことをいつでもできるという、ユニバーサルデザインの‘まち’とはなってい

ないのが現状である。公共施設においてさえも、諸施設の出入り口にある段差の解消などのバリアフリー化もまだ十分に行われているとは言いがたい。竹原市も例外ではない。

観光の視点から捉えたとき、竹原市は尾道市に比較して大きく後れをとっている。JR 西日本の PR 等で頻繁に取り上げられ、さまざまな媒体（雑誌、テレビなど）で特集されることが多く、観光客が年中絶えないのが尾道である。しかし、竹原市は尾道にない環境資源を持っている。それは、“坂道の町”と称され特徴づけられる尾道とは正反対に、歴史的空間と商業施設が連続して平面的に広がっていることである。確かに、見上げれば山、見下ろせば海、それぞれの景色を楽しめ、迷路のような坂道を巡ってお寺やユニークなお店、古い家屋が斜面に張り付いている様を観ることができる尾道は楽しみが多い。しかし、その楽しみを得るには、‘迷路のような坂道’をゆくことのできる体力が必要なのも確かである。竹原市であれば、このような尾道で味わうことのできる楽しみを、ゆったり散策することで味わえるのである（もちろん、楽しめるスポットが今より相当増えてゆくことは必要であるが）。

このような環境資源を有する竹原市ならば、現在の‘まち’が持つ、様々なバリアを取り除いていけば、尾道の有する雰囲気を楽しみたいが体力面での不安からあきらめた人々に、よい空間を提供できることになる。

しかし、大切なのはそのようなバリアを取り除いた‘まち’とすることではない。確かに、住む人にとっても不自由を強いような‘まち’は改めねばならないが、それよりも大切なのは、今の竹原市が抱えている根本的な問題、訪れる人々をもてなす気持ちが表れていない‘まち’、尾道市や呉市のような近辺のまちが観光の点で大きく脚光を浴びている一方で、集客が伸び悩み、取り残されてしまった感覚を持ち、自信を失った‘まち’に、住民自らが誇りを持ち、訪れる人々をやさしくもてなせる心を持てるようにしてゆくことのきっかけに、‘坂道のない、やさしさのあふれる町’と変わっていくことである。

このような‘やさしさのあふれるまち’と竹原市が変わってゆくには、そこに住むすべての人々のまちに対する思いを変えていくことが必要である。

さて、だれもがしっかりと‘まち’と関わりながら、まちづくりを進めていくこと、そして竹原市民が誇れる“何か”を訪れた人々に提供できるようになるには、どのようなことをすればいいのか。その方策として、私は、地域の小中学校との共同によるまちづくり学習との連携をあげたい。

地域には多数の小中学校が公立私立を問わず存在している。竹原市内にも10の小学校と4の中学校がある。地域の多くの市民がそれらの学校の卒業生だということも多い。また学校体育館は夜間に市民のスポーツ活動に使われたり、選挙の時には投票所や開票所に使われたりもすることが多い。また震災などが起きた際には、体育館や校庭は被災者の一時的避難場所や仮設テント住宅の配置場所となったりもする。このように学校施設は、地域の中の人口

配置に従うように計画的に立地しているので、教育の場以外にも様々な役割が期待され、また利用されてきた。都市の中でこのような配置上の特徴をもち、市民にも良く知られ、また、期待もされている学校施設および学校を利活用して、様々な連携を生み出して、住民の竹原市に対する思い、とりわけ誇りを根付かせていくことが大切である。

学校を拠点としてまちづくりに対して面白いアイデアなどが出てくれば、それをもとに「参加型まちづくり」へと広げていくことである。きっかけはとても近いところに転がっていることもあるだろう。それに気付かせて、児童・生徒達に自分たちの‘まち’の魅力を理解させ、誇りを持たせることができれば、次世代を巻き込んで、既に存在する地域資源と新しいまちの魅力発見との両方が活かされるまちづくりが、学校内外で広がっていくだろう。

自らがまちを構成する一員である、ということを実感するためにも、学習の中で体系的に学校のカリキュラムとしてまちづくりや地域環境にしっかりと取り組むことが大切である。そこで“まち”というテーマを総合学習で取りあげる。さらに、それを社会科などの1つの教科だけで学ぶのではなく、学習のやり方も総合して、各教科の先生方が総出で取り組んでみたらどうだろうか。

例えば、次のようにして、全科目の授業テーマを「わたしたちのまち」にしてみる。

- ・理科 学校の敷地内および地域に出て行き、樹木や花の名前を調べたり、飛んでくる鳥、昆虫の種類を調べたりする。竹原市で当てはめるならば、実際に市の木である竹について細かく調査したり、実際市内のどのあたりに一番多く分布しているのかなどを調べたりしてみる。気象についても気温、雨量、風向き、風速、季節の移ろいなど変化を把握する。
- ・社会 このまちの産業、暮らし、土地の使われ方などを調べたり、まちの歴史を調べ今のまちとどのような違いがあるのかを表す今昔地図を作ったりしてみる。竹原の場合は、塩田で栄えた背景や『町並み保存地区』との関連についてなど、お年寄りにこのまちの昔のことをヒアリングするのもよいだろう。
- ・国語 そうして聞き取りしたり、調べたりしたことを「ガイドブック」としてまとめるために項目別に編集したり、記事を書く。このまちを見て歩いた感想やこれからのこのまちの夢なども、時間を使ってまとめる。
- ・図工 その「ガイドブック」にイラストを添えたり、面白い読み物になるようなグラフィックデザインを施したりする。見て楽しいものになるように工夫を凝らす。また町に伝わる伝統工芸などをお年寄りから教わりながら体験したり、新しくそのまちのシンボルとなるようなオブジェを考えてみたりする。
- ・音楽 このまちに伝わる祭りや唄やお囃子をあらためて理解し、みんなで唄ったり踊ったり劇にしたり、楽譜にしてみたり、体で感じる……。

こんな具合に科目別タテ割りで学んできたことを、「まち」という総合的・横断的なテーマで束ねなおして、まち全体像を浮き彫りにしてみると、総合学習にみんなで知恵を出し、先生も総動員して自分たちでアイデアをだしあった「参加」の喜びや達成感を味わえることにもなるだろう。観光事業を含め「持続的開発」をしていこうというのであれば、まちづくりの志も持続して、次の世代にしっかり伝わり、その世代が興していくような力を作り出せるように、次世代の市民である子供たちを視野に入れまた楽しくユニークなアイデアを吸収しながら、あらゆることを進めていくことが、発展の1歩に必ずつながると思う。

住む人々がまちに誇りを持てば、来訪者に対しても、その誇りに思うまちに来てくださったのだから、しっかりとおもてなしをしようとするはずである。この“おもてなし”の心が子ども達から大人へと広まっていけば、来訪者はこの竹原に対して好印象を持ち、再び、やさしいまちに包まれる気持ちを体感しに来訪してもらえらるだろう。

③ 来訪者の視点からの‘まち’の有する環境資源の価値向上

まちづくりに必要な視点は、自分たちの‘まち’の客観的な視点からの冷静な評価である。今回、調査研究を行うにおいて、幾度も竹原市およびまちなみ保全地区を訪れたが、その時に来訪者として感じた事柄から、‘まち’の有する環境資源の価値を高めるために必要なことを考察した。

●わかりやすい‘まち’に

案内、誘導のサインはその土地に初めて訪れた人にとってとても重要なものである。様々な案内表示板はまち全体の姿と来訪者の現在位置の関係を表し、今、自分がどこにいるのかすぐにわからせてくれる。誘導の標示は、目的の場所まで矢印などで方向を示すものがあれば途中で順路を認識することができる。竹原にももちろん存在していたが、わかりにくいものであった。またそのデザインも竹原独自のものでは少なく、また個性的なものはあっても統一されたものではなかった。地場産品を活用した、‘まち’の有する環境資源をイメージできるサイン表示としていくことが必要である。

●複数の地域を繋ぎ広範囲な交流を

通常、竹原市を訪れるための主要アクセスは車か JR ということになるが、日帰り滞在が多く立ち寄り観光になってしまっている。これが、観光が地域への経済的な効果を生み出さないことにつながっている。これを解決するためには、竹原市単体でなく、周辺に立地する個性的なまちとネットワークして、一体として来訪者を呼び込む手段に訴えるべきである。

その先進事例として、愛媛県が推進している「地域文化遺産交流計画」がある。これは歴史的な資産を活かして、複数の地域を繋ぎ広範囲な交流を推進しようという計画であり、具体

的には「大洲・内子・宇和地域文化遺産交流基本計画」である。大洲・内子・宇和の3地域は、いずれも歴史的な資産に富む。そこで、これら歴史的資産に加えて、文化資産や人的資産を交流させることにより、地域の活力を高めようとしている。単なる施設の地域的な共同利用ではなく、より高いレベルのネットワークの構築が意図されている。そこで注目されるのは、観光も地域交流の側面から見直している点である。従来型の‘観光客’だけをターゲットとするのではなく、「リピーター（地域のファン）」、「UIJリピーター（地域の担い手）」を「持続可能な交流」の対象とみなし、拡大していこうとしている点である。さらに、経済的効果ももちろん必要であるが、それだけではなく、“癒し”、“体験”、“学習”、“交流”に力点を置き、発想の転換が図られていることが素晴らしい。

このような取り組みを竹原市で活用するのである。

例えば、隣接し、JRやバスの路線でつながっている“西条”、“竹原”、“三原”を文化的に交流させることによって地域の魅力を一体となって高めるのである。西条は古くから酒造りが盛んで、通称「酒蔵通り」と呼ばれる旧山陽道周辺には、多くの酒蔵が残っている。宿場町として栄え、兵庫県西宮市の灘や京都市の伏見と並ぶ銘醸地である。最近になって、陶器販売を行なうギャラリーや個性的なカフェなどがオープンして新たな空間として注目されている。一方、古くから瀬戸内の交通拠点だった三原は、三原城を中心に栄えた港町。日本初の海城だった三原城跡や開山600年を超える仏閣など、見どころが点在している。このように風情のある建物や町並みの残る3地域を交流させスタンプラリーや様々な周遊特典をつけて、来客者にアピールするのである。

●空き家の活用

竹原には、日帰り滞在の観光客が多いことは問題点として上記にも述べたが、空家を使って田舎暮らしや町家暮らしを体験できるスポットを作る。今、京都では空前の“町家ブーム”が起こっているが、古くからある伝統的な建築物を残していこうという動きから始まり、古い家を改装・修繕しカフェやレストランにしたり、宿泊施設を設けたり様々な用途に変貌している。京都へこの“町家めぐり”を目的に訪れる観光客も多い。また最近の若い世代は、レトロで落ち着いた佇まいに魅力を感じており、古い賃貸木造家屋をわざわざ自分の手で改装し、自宅兼、アートスペース、カフェなどとして切り盛りしている人が多数出てきている。「古いものの良さを生かして再生する」(リノベーション)ということに価値を見出す人が増えているのである。

そこでまちなみ保存地区内に残る歴史的な建物を利用して、竹原の歴史や地域のぬくもりを感じることでできる場所を訪れた人に提供する試みを進めてもらいたい。参考となる京都で進んでいるプロジェクトの一例を以下に示す。

『町家体験宿泊施設 試住空間エコハウス町家プロジェクト』について

「町家暮らしを体験できる貴重なスポット」として様々なメディアから注目されているこの宿泊施設の主催者は当時京都府立大学住環境学科専攻大学院生であった女性で、「都市計画には都市開発、地域開発の理論や専門家の話だけではなく、まちをつくるには住民との交渉、対話が必要」と考え、町家を借りたい若い人達とその町家の大家をつなぐ活動に住民の視点から参加したのがきっかけである。空き家の情報を提供したり、大家さんとの交渉、説得したりと精力的な活動を続けていた。京都は大学生が非常に多い。町家倶楽部ネットワーク（京都の町家に“住みたい”いという人と“住んで欲しいと思っている家主”とを結びつける活動をしている）の活動に参加する中で、町家住まいを体験できるようなスペースをつくろうと決意した。自分でイメージし、改装・修繕に着手、建築学科の学生、主婦、大工、近隣の住民などの多大な協力によって、数々の課題を背負いながら完成した。この作業を通し関わった人々との間に一体感も生まれ、地域のコミュニケーションも深まったという。完成当日には近隣の住民を招いてのお披露目会、ミニコンサートなどのイベントが行なわれ、人々の理解も得ることができたようだ。

リノベーションした「エコハウス」には新しいトイレ・ユニットバスを増設、エアコンなども完備している。「エコハウス」の宿泊体験者は、ごはんは自分で作るなり外へ食べにいくなり自由。あくまで“体験”なので宿泊者が掃除し、寝具の準備もする。滞在中は日記をつけてもらうことになっていて海外からの宿泊者も多い。オープン後は宣伝などの広告は一切出してはいないが、エコハウスの存在が知れ渡るほど利用者は増えていくに違いない。町家のデザイン的な定義より住んでいる人の生活の知恵や気持ちが表される建物といわれているようだ。体験者は、どこか懐かしく優しい気持ちに包まれるのではないだろうか。



写真－11 エコハウスの外観



写真－12



写真－13



写真－14

内装は質素でこじんまりしているが雰囲気は温かい

このように、京都では専門的な知識のある人だけでなく知識のない学生や主婦など精力的に活動している。その土地を好きな人が外部から訪れた人にも好きになってもらえるような取り組みを考えることも‘まち’の持続的な発展には重要であり、竹原市でも是非取り組んでもらいたい。

(8) さいごに

竹原市には上述してきたようにも素晴らしい地域資源がある。それらは一気に風景を変えてしまったり、これまでの姿と異なるものが突然出現したりするといったものではない。まちの歴史を振り返ってきても、その生命は私たち人間の一生よりはるかに長い時間をかけてつくられ、受け継がれ、再生と更新を繰り返してきた。

わずか2年間の調査研究であり、十分に竹原市の『町並み保存地区』の抱える問題を分析し、これを活用して、観光客数を増やし、観光消費を増えさせる有効な提案ができたとは言えない。今回の提案も、小さく、思慮の足らないものであるかも知れない。しかし、これらが少しでも竹原市再生への1歩へつながり、長い歴史の中で役割を見出せたらうれしく思う。

あらためてまちを再生させるということの奥深さと難しさを思い知らされた研究であったが、竹原市が好きだという人が一人でも増え、そのひとりひとりの努力がいつかまちを輝かせていくことを祈っている。

最後に、最近、『町並み保存地区』を訪れたときに撮った写真を示したいと思う。批判的なことを述べてきたが、これらの写真にあるような、“おもてなしのこころ”、“伝統を愛し、守ろうとするこころ”は、今もこの地区に残っている。これの住み手の思いが、もっと、生活感を持って表出し、来訪者とのこころとこころの交流につながり、“たけはらに行くときやさしい町並みで落ち着いた気持ちになれるが、それ以上に、あそこで今も暮らし続けている人と話し、時にはそこで造られ続けている日本酒を酌み交わすのがすごく楽しいし、気持ちが豊かになる。条件が合えば住んでもいいかな”という思いを来訪者に沸き立たせるような状態を生み出せたらと強く願う。

参 考 文 献

- ・竹原市都市計画マスタープラン（平成15年3月）
- ・高橋志保彦、「都市景観デザイン 空間創造の実践」
- ・原昭夫、「自治体まちづくり」学芸出版社
- ・中出文平・地方都市研究会、「中心市街地再生と持続可能なまちづくり」学芸出版社
- ・インターシティー研究所、「都心居住都市再生への魅力づくり」学芸出版社
- ・たけはら町並み観光ビジョン策定委員会、「たけはら町並み観光ビジョン」
- ・西村幸夫、「歴史を活かしたまちづくり」古今書店



- ・ 上田賢一, 「広島・尾道～上選の旅～」
- ・ 中国新聞 <http://www.chugoku-np.co.jp/>
- ・ 日経新聞 <http://www.nikkei.co.jp/>
- ・ ウィークリープレスネット <http://www.pressnet.co.jp/>
- ・ 竹原市 <http://www.city.takehara.hiroshima.jp/>
- ・ 社団法人竹原観光協会 <http://www.urban.ne.jp/home/kankou/takehara/>
- ・ NPO 法人ネットワーク竹原 <http://www.i-love-takehara.jp/>

ま と め

各市町での環境資産を活用した持続可能な発展の方策として、以下のことを指摘した。今後、何らかの形でこれらの提案を一部でも良いから実現化して、それぞれの市町に寄与できれば考えている。

<旧安浦町>

野呂川流域には多くの自然資源や観光資源が存し地域住民もそれらを高く評価し地域活性

化を願っているにも関わらず、有効な資源活用ができていない現状が再確認された。最大の原因は高齢化・過疎化による若き指導者の欠如、積極的に体を動かせる住民の不足である。地域交流、グリーンツーリズムあるいは野呂山観光との連携から、いくつかの地元資源を活用した活性化対策を提言した。

なお、旧安浦町は市町村合併により呉市に編入された経緯から、より広域的な視点より同地域の位置付けや活性化の戦略を模索する局面に至っている。

<江府町>

町民対象のアンケート結果をもとに、「江尾駅周辺商店街」が活力を持ち魅力的な商店街となる具体的提言作成のための聞き取り調査を行い、江府町商工会と共催で提言案の説明会や商工会会員との意見交換を実施した。また、地球温暖化対策を目指し、江府町で利用可能なエネルギーを活用した活力ある町づくりについても検討した。

江尾商店街の抱える問題は次のものであった。

- 人口の減少・高齢化・後継者不足・通販の普及など社会的現象の影響を大きく受けている。
- 車社会になったにも関わらず、商店街の構造改善が遅れている。
- 商店街の努力、連携、経営改善意識が低くあきらめにも似た状況にある。
- 商店街に若い息吹と活力が不足している。などの問題を抱えている。

しかし、何とかしなければという思いも強い。外から刺激を与えるなどのきっかけがあれば活性化も不可能ではない。大山の源流水から醸造される地ビールや地酒、そばなどすでに試行されている地域ならではの素材の活用が必要と考えられる。

江府町で利用可能なエネルギーを活用した活力ある町づくりを進めるにあたり重要なことは次のものであった。

- 自然豊かな地域で営む農産資源が豊富である。農業と観光を結びつけることが最も重要と思われる。
- 町の一部地域は、国立公園にもなっており、これらをからめた計画づくりも必要と思われる。
- 森林資源が豊富であり間伐材などの活用が可能である。また、落差の大きい小川や風力、太陽光、家畜糞尿などを活用すれば町のエネルギーをかなりの割合でまかなうことも可能である。その結果、持続可能な地域社会づくりのモデルにもなりうるものと思われる。
- 子供の将来を心配し、地球温暖化問題を真剣に考えている子育て中の母親の活力と役場で問題意識を持ちながら地域社会のしがらみに悩んでいる若い世代の活用が必要であろう。

<竹原市>

『町並み保存地区』という高質の歴史的環境を有するにも関わらず、来訪者にとっては単に「見る」だけの対象となっている。「まちの活力」とするためには来訪者に「そこでしかできない体験」を提供し竹原を「体感」してもらう工夫が必要であり、町並み、特産品、戦争遺跡等を活用した地元住民との体験学習交流が重要である。そのためには特に若年層住民にわが町を誇りに思う意識を持ってもらうことが大切である。

最後に、本研究調査にあたり多大な協力と支援をいただいた旧安浦町ならびに江府町役場職員の方々、竹原市町並み保存地区の方々およびそこに訪れていたの方々、関連文献収集やアンケート統計処理作業に積極的に参加してくれた広島修道大学人間環境学部関連ゼミナールの諸君に深く感謝する。なお、本研究は、広島修道大学総合研究所2004～2005年度調査研究費の交付を得て実施したものである。